

城崎郡日高町

# 山宮遺跡

— 農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

平成10年3月

兵庫県教育委員会

城崎郡日高町

# 山宮遺跡

— 農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

## 例　　言

1. 本書は、城崎郡日高町山宮字般若に所在する山宮遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に先立つもので、兵庫県豊岡土地改良事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成7年度に確認調査を、平成8・9年度に全面調査を実施した。なお、全面調査については、(株)クマダに作業委託を行った。
3. 整理作業は、平成9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。なお、遺物写真については鶴衣川に委託した。
4. 調査は兵庫県豊岡土地改良事務所の農林漁業用揮発油税源身替農道整備事業に伴う多角点座標をもとに国土座標を求め、これを基準に実施した。なお、調査地は第V系に位置する。
5. 標高は東京湾平均海水準を基準とした。
6. 本書の執筆は西口和彦、鐵英記、池田征弘、野村辰右が行い、編集は池田が行った。
7. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水）に保管する。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。  
井上智博、大久保浩二、岡田憲一、加賀見省一、川崎保、新東晃一、西村康、矢野健一、山田猛、和田長治

## 凡　　例

1. 遺構については、堅穴住居跡をSH、土坑をSKと略称している。
2. 遺物については須恵器の断面を黒塗りにし、縄文土器、土師器、石器の断面を白抜きにしている。

## 本文目次

第1章 調査の経緯	.....	(池田征弘) ..... 1
第1節 調査に至る経過		
第2節 発掘調査の経過		
第3節 整理作業の経過		
第2章 遺跡をとりまく環境	.....	(野村辰右) ..... 3
第3章 調査の結果		
第1節 調査の概要	.....	(池田) ..... 5
第2節 遺構について		
1. I区の遺構	.....	(野村) ..... 9
2. II区の遺構	.....	(鎌英記) ..... 12
第3節 遺物について		
1. 繩文時代の遺物	.....	(池田) ..... 14
2. 古墳・奈良時代の遺物	.....	(鎌) ..... 50
第4節 探査の結果	.....	(西口和彦) ..... 52
第4章 まとめ		
第1節 繩文時代について	.....	(池田) ..... 54
第2節 古墳・奈良時代について	.....	(鎌) ..... 55

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第22図 縄文土器（9）	23
第2図 周辺の遺跡分布図	4	第23図 縄文土器（10）	24
第3図 遺跡周辺の地形	5	第24図 縄文土器（11）	26
第4図 調査区配置図	6	第25図 縄文土器（12）	27
第5図 遺構配置図・調査区地区剖面	7	第26図 縄文土器（13）	28
第6図 集石1	8	第27図 縄文土器（14）	30
第7図 集石2	10	第28図 縄文土器（15）	31
第8図 集石3	10	第29図 縄文土器（16）	32
第9図 SK01・03	11	第30図 縄文土器（17）	33
第10図 SK02	11	第31図 縄文土器（18）	34
第11図 SH01	12	第32図 縄文土器（19）	35
第12図 SH02	13	第33図 石器（1）	46
第12図 SH03	14	第34図 石器（2）	47
第14図 縄文土器（1）	15	第35図 石器（3）	48
第15図 縄文土器（2）	16	第36図 石器（4）	49
第16図 縄文土器（3）	17	第37図 古墳・奈良時代の土器	50
第17図 縄文土器（4）	18	第38図 石製紡錘車	51
第18図 縄文土器（5）	19	第39図 採査成果図	53
第19図 縄文土器（6）	20	第40図 縄文土器の様相（1）	56
第20図 縄文土器（7）	21	第41図 縄文土器の様相（2）	57
第21図 縄文土器（8）	22		

## 表目次

第1表 縄文土器の出土位置	37	第6表 縄文土器一覧表（5）	42
第2表 縄文土器一覧表（1）	38	第7表 縄文土器一覧表（6）	43
第3表 縄文土器一覧表（2）	39	第8表 縄文土器一覧表（7）	44
第4表 縄文土器一覧表（3）	40	第9表 石器一覧表	45
第5表 縄文土器一覧表（4）	41		

## 写真図版 目次

- |        |                |                 |
|--------|----------------|-----------------|
| 写真図版1  | ・上 調査地遠景（南東から） | ・下 調査地遠景（東から）   |
| 写真図版2  | ・上 I区全景（北から）   | ・下 II区全景（東から）   |
| 写真図版3  | ・上 I区全景（北西から）  | ・下 I区全景（南東から）   |
| 写真図版4  | ・上 集石1～3（南から）  | ・下 集石1（東から）     |
| 写真図版5  | ・上 集石2（南から）    | ・下 集石3（南東から）    |
| 写真図版6  | ・上 II区全景（南東から） | ・下 II区東半部（北西から） |
| 写真図版7  | ・上 SH01（西から）   | ・下 SH01甌（西から）   |
| 写真図版8  | ・上 SH02（南から）   | ・下 SH02甌（北から）   |
| 写真図版9  | ・上 SH03（南から）   | ・下 SH03甌（東から）   |
| 写真図版10 | ・上 繩文土器（1）表    | ・下 繩文土器（1）裏     |
| 写真図版11 | ・上 繩文土器（2）横    | ・下 繩文土器（2）俯瞰    |
| 写真図版12 | ・上 繩文土器（3）表    | ・下 繩文土器（3）裏     |
| 写真図版13 | ・上 繩文土器（4）表    | ・下 繩文土器（4）裏     |
| 写真図版14 | ・上 繩文土器（5）表    | ・下 繩文土器（5）裏     |
| 写真図版15 | ・上 繩文土器（6）表    | ・下 繩文土器（6）裏     |
| 写真図版16 | ・上 繩文土器（7）表    | ・下 繩文土器（7）裏     |
| 写真図版17 | ・上 繩文土器（8）表    | ・下 繩文土器（8）裏     |
| 写真図版18 | ・上 繩文土器（9）表    | ・下 繩文土器（9）裏     |
| 写真図版19 | ・上 繩文土器（10）表   | ・下 繩文土器（10）裏    |
| 写真図版20 | ・上 繩文土器（11）表   | ・下 繩文土器（11）裏    |
| 写真図版21 | ・上 繩文土器（12）表   | ・下 繩文土器（12）裏    |
| 写真図版22 | 石器（1）          |                 |
| 写真図版23 | 石器（2）          |                 |
| 写真図版24 | 古墳・奈良時代の遺物     |                 |

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

山宮遺跡は日高町西部の山間部の高原地帯に位置する。この地域は冬季には神鍋山スキー場をはじめとするスキー場などが賑わうとともに、夏季は高原野菜などの生産が盛んである。このたび、点在する野菜の集荷場を統合整理する計画に合わせて、農作物や生産資材の搬出入ルートの短縮化・効率化を図るために、豊岡土地改良事務所により基幹農道の整備が、周知の遺跡である山宮遺跡を含む地域に計画されることになった。そこで兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では豊岡土地改良事務所より依頼を受け、平成7年度に確認調査、平成8・9年度に全面調査を行った。



第1図 遺跡の位置

## 第2節 発掘調査の経過

### (1) 確認調査（遺跡調査番号950233）

調査担当者 調査第3班 山上雅弘 服部寛

調査期間 平成7年8月29日～9月1日

調査面積 64m<sup>2</sup>

周知の山宮遺跡を中心に2×2mのグリッドを16ヶ所（調査面積）設定し、人力により掘削し、精査を行った。その結果、遺構については検出できなかったが、南半部の10ヶ所のグリッドで縄文土器、須恵器、土師器などの遺物が確認された。

### (2) I区の全面調査（遺跡調査番号960359）

調査担当者 調査第3班 池田征弘 野村辰右

調査期間 平成8年12月3日～平成9年2月3日

調査面積 1448m<sup>2</sup>

確認調査で確認された範囲のうち、東部を中心として調査区を設定した。重機により表土を掘削したのち、人力により包含層を掘削し、遺構の精査を行った。航空写真を含む写真の撮影や実測図の作成を行った。調査は積雪により困難を極めたが、その結果、集石3基を検出し、包含層から縄文時代の土器・石器を比較的多く採集することができた。

(3) II区の全面調査（遺跡調査番号070165）

調査担当者 調査第3班 西口和彦 鐵英記 池田征弘

調査期間 平成9年5月19日～6月12日

調査面積 678m<sup>2</sup>

確認調査で確認された範囲のうち、残りの西部を中心として調査区を設定した。今回は掘削を行う前に、奈良国立文化財研究所西村康氏の指導をえて、電気探査・磁気探査・地中レーダー探査を行った（第3章第4節参照）。その後、重機により表土を掘削したのち、人力により包含層を掘削し、遺構の精査を行った。航空写真を含む写真の撮影や実測図の作成を行った。その結果、堅穴住居跡3棟を検出し、住居跡埋土などから古墳・奈良時代の須恵器・土師器、縄文時代の土器・石器を探査することができた。

### 第3節 整理作業の経過

整理担当者 調査第3班 鐵英記 池田征弘 野村辰右

整理普及班 長濱誠司

整理作業は平成9年度の全面調査が終了直後より開始した。遺物はコンテナにして12箱分出土し、魚住分館にて洗浄したのち、当事務所にてネーミング接合・復元・実測・トレース・レイアウト・写真撮影などを行った。それと平行して遺構図についてもトレース・レイアウトを行った。なお遺物写真の撮影は森衣川に委託した。

上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

主任技術員 古谷 章子	図化技術員 木村 淑子	図化技術員 白井 昌代
八木 和子	藤 幸子	山口 幸恵
企画技術員 前山三枝子	井内 ゆり	図化補助員 中村 正子
矢島 馨	茅原加寿代	
小山みゆき	岸野奈津子	

## 第2章 遺跡をとりまく環境

山宮遺跡の所在する日高町は但馬地方のほぼ中央部に位置する<sup>(1)</sup>。日高町の東部には円山川が流れ、その周囲の江原や国府などでは低地が広がっている。それに対して、西部には蘇武岳（標高約1000m）を最高峰とする山々がそびえている。当遺跡は円山川の支流である稻葉山川を約6km西へ逆上った標高200m台の台地上にあり、神鍋山の東南東約2kmに位置している。神鍋高原と呼ばれるこの地域は、更新世末期から完新世にかけて神鍋山を中心とした火山活動によって、溶岩やスコリア（岩漿）に覆われた火山地形が形成されている。

旧石器時代の遺跡は日高町では確認されていないが、但馬地方では表面採集による遺物が3点出土しており、当町でも旧石器文化が存在した可能性が高い。

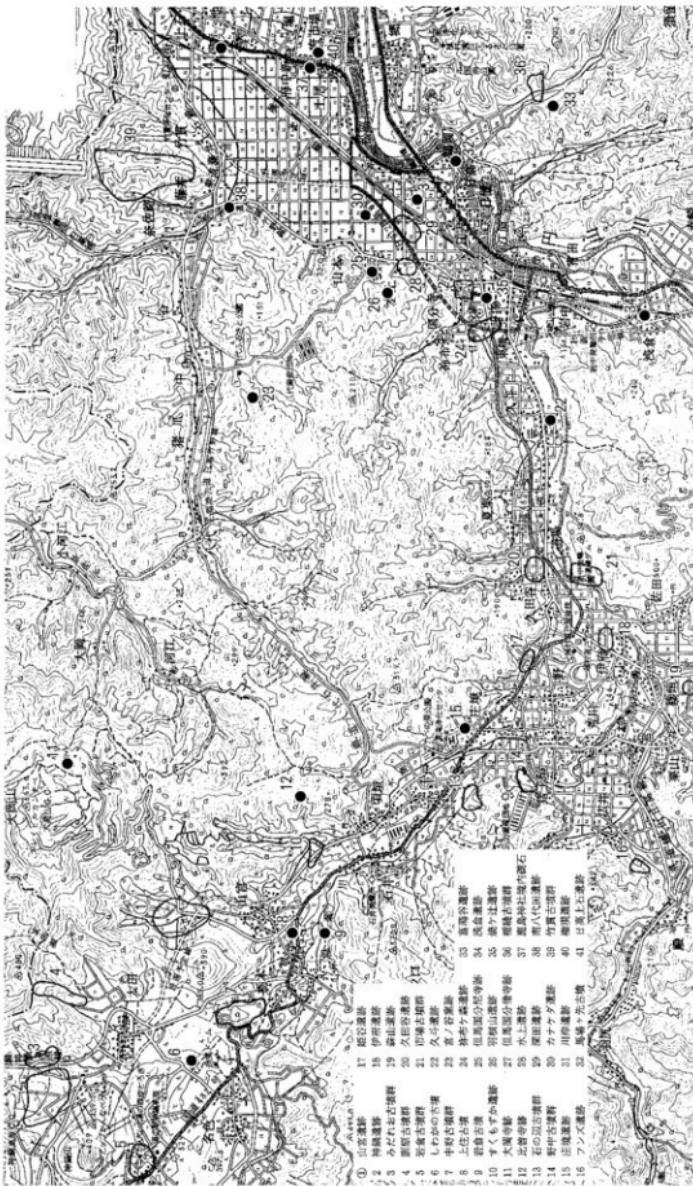
縄文時代では、早期・前期を中心に神鍋遺跡(2)・山宮遺跡(1)からまとまった土器が出土しており、神鍋遺跡では草創期の爪形文土器も出土している。中期までは山岳地域での生活を中心であったが、後期以降、伊府遺跡(18)・森山遺跡(19)・布布ケ森遺跡(24)・水上遺跡(25)・焼ヶ辻遺跡(35)など稻葉川近辺を中心とする低湿地にその生活主体を移していく。

弥生時代の遺跡としては、縄文時代晚期から断続的に続く森山遺跡や初の圧痕のある土器の出土した布布ケ森遺跡などが挙げられる。また、南八代田遺跡(38)からは河内からの搬入品と思われる土器も出土している。久田谷遺跡(20)からは突線鉢式銅鏡片が出土しており、およそ3分の1から4分の1の破片が見つかっている。

古墳時代には、但馬では円山川流域を中心に水運交通が発達し、古墳の分布においても他地域よりも圧倒的にその数が多い。日高町においても同様に、円山川やその支流である稻葉川沿いの丘陵・尾根稜線上に多くの古墳があり、その数は約700基を数える。そのなかで、前・中期の古墳はごく少数である。平野部に立地する馬場ヶ先古墳(32)は、主体部として竪穴式石室を採用した町内最古の古墳である。また羽根山古墳(26)からは箱式石棺が出土している。後期になると横穴式石室を主体部とした群集墳である橋塚古墳群(36)や市場古墳群(21)などが現れ、稠原古墳群(4)・岩倉古墳群(5)などのように神鍋高原にも古墳がみられるようになる。それらを築造した人々の集落に関しては分からぬ部分が多く、水上遺跡などで多くの遺物出土しているが、遺構の検出に関しては極めて少ない。今回、山宮遺跡ではやや時期が新しいものであるが堅穴住居跡を検出した。

奈良時代になると日高町東部の低地は但馬國の中心地となったようで、寺院や官衙と推定される遺跡が数多く確認されている。但馬國分僧寺跡(27)では、塔跡・金堂跡・中門・回廊などが確認され、溝内からは紀年銘木簡が出土している。また、但馬國分尼寺跡(25)では水田中に2個の礎石が露出しており、他にも礎石と思われる石材が埋没していることが確認されている。江原から国府にかけての広い範囲で、国府などの官衙に関連すると思われる遺跡が見つかっている。布布ケ森遺跡では掘立柱建物・井戸・溝などの遺構と共に墨書き土器・円面鏡・施釉陶器・漆紙文書などが出土している。その他の遺跡では遺構はあまりはっきりしないが、姫谷遺跡では人形・蒼牛・馬形・鳥形木製品など、川岸遺跡(31)では木簡・木履などの木製品や墨書き土器が出土している。深田・カナゲダ遺跡では圓筒、木簡やその他の木製品、墨書き土器、施釉陶器など特殊な遺物が数多く出土している。

第2図 周辺の道路分布図（日高町全国 日高町発行 平成8年 緯尺10万分の1）



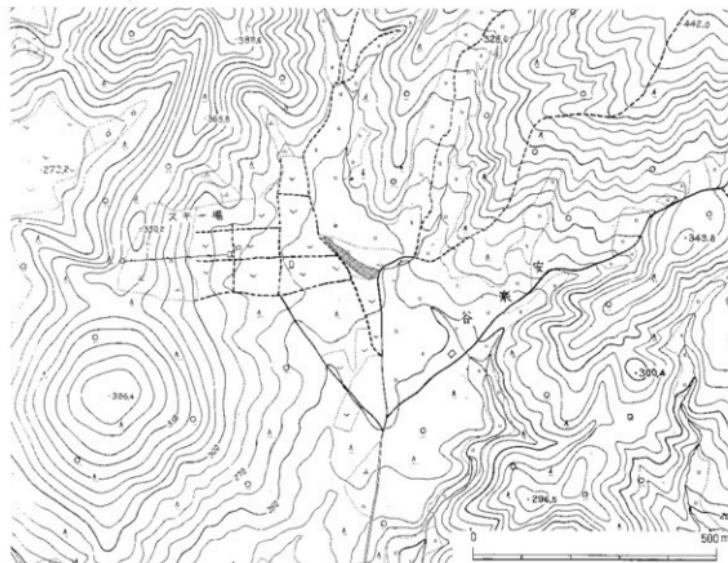
## 第3章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

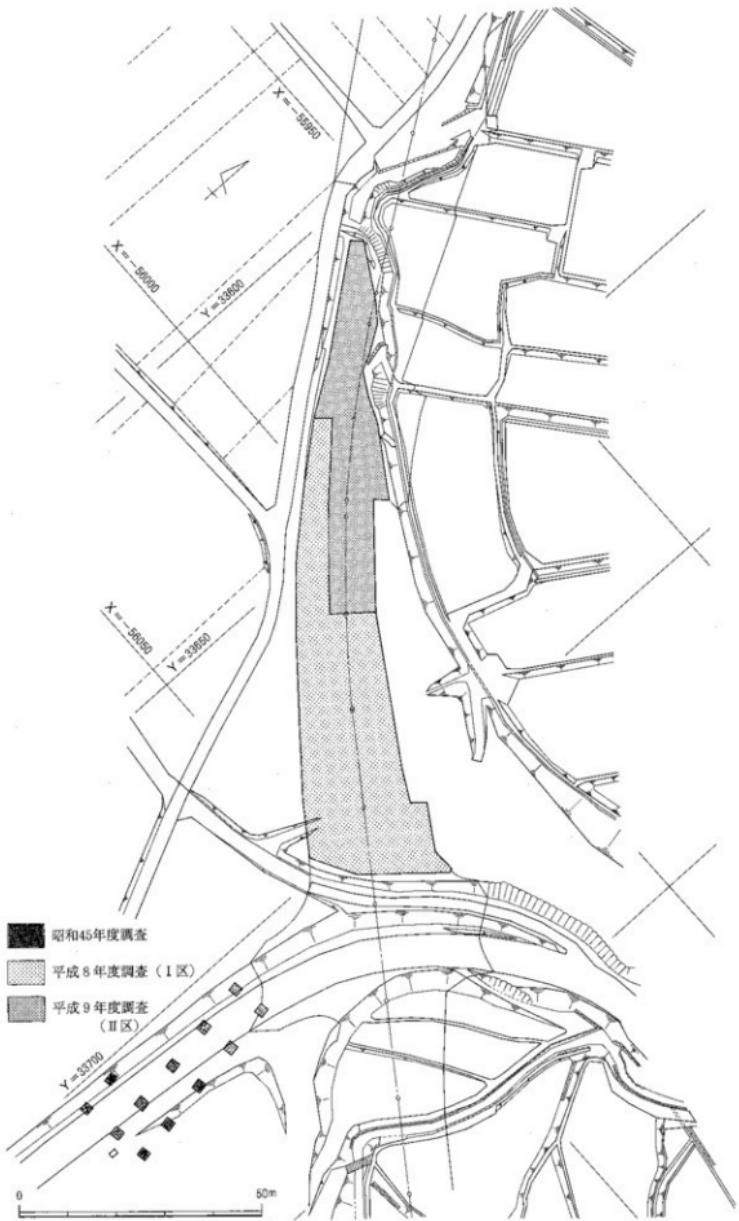
山宮遺跡は昭和40年頃に地元の研究者大江茂、川見時造、和田長治氏などによって発見され、多数の遺物が採集されている。昭和44年、遺跡北方の大岡山にゴルフ場が建設されることとなり、それに伴い遺跡内に道路が計画されることになった。それを受けて兵庫県教育委員会は同年に発掘調査を実施したが、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。昭和45年、新たに道路の建設が計画されたため、さらに調査を行ったが、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。なお、この時期に、夏期休暇用グランド造成や道路・宅地造成などによって今回の調査地点やその東方・南方に隣接する網文後期の集落および古墳などが、調査を経ずして破壊された<sup>(2)</sup>。その後も農道の付設時に削られた崖面に貯蔵穴が確認されている。

遺跡はブリ山（標高383m）の東側に広がる火山の噴火によって形成された扇状地状の緩斜面に位置する。調査地はその扇状地地形の縁片に位置し、東側は段丘崖となっている。調査区西部には比較的深い谷が切れ込み、微高地はII-2区から東側の段丘崖より抜け、I-8・9区に向かって舌状に延びるようである。

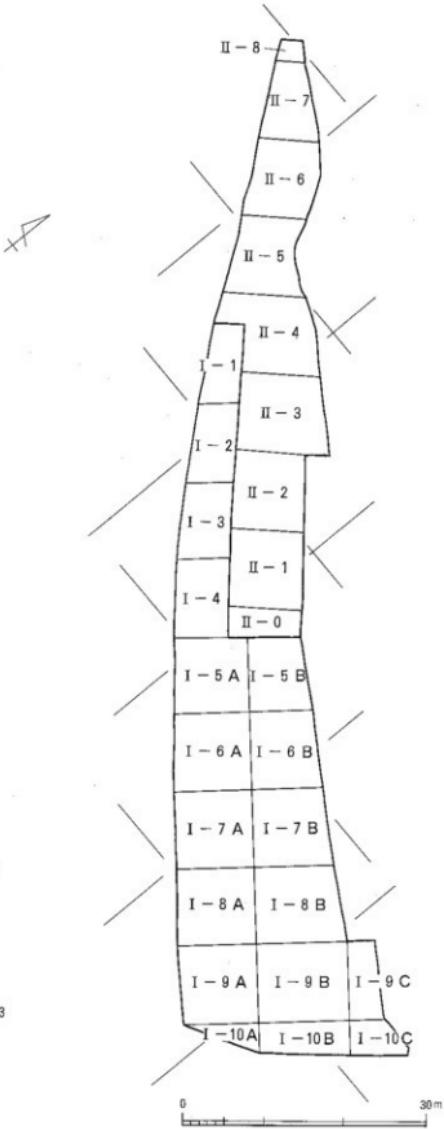
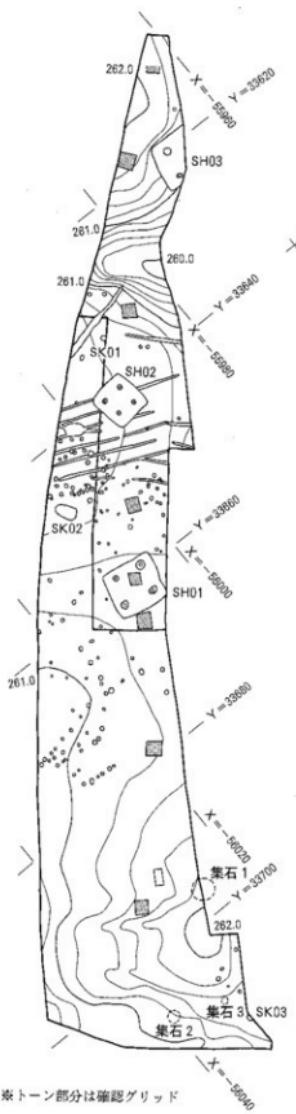
層序は表土（植物の根によって擾乱された黒ボク）、黒ボク、地形の低い部分では黄色～暗黃灰色の



第3図 遺跡周辺の地形（日高町全図（1） 日高町発行 昭和38年）



第4図 調査区配置図

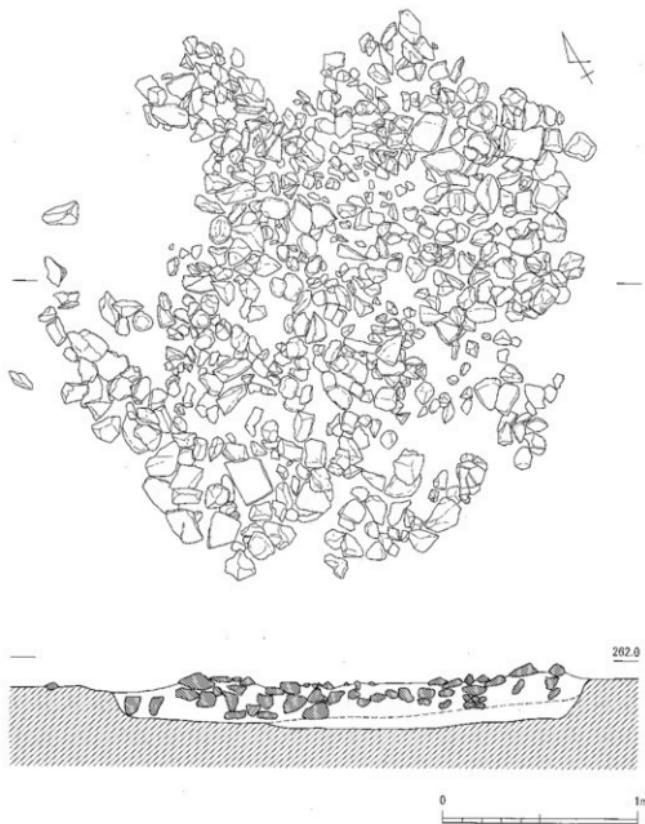


第5図 遺構配置図(左) 調査区地区割り図(右)

シルト、火山礫（スコリア）と堆積している。遺構は断面で確認できたわけではないが黒ボク土中より切れ込むものと思われ、遺物は表土、黒ボク土中より出土した。

I 区では調査区東端、I - 8・9 区の舌状に延びた微高地の先端周辺で集石を 3 基と土坑 1 基（SK 0 3）、その他の地区で土坑 2 基（SK 0 1・0 2）を検出した。数多く検出されたピットについては、そのほとんどが最近までの稻置の据え付け穴と思われ、その他に検出された溝も近年の耕作に関わるものと考えられる。

II 区では方形の整穴住居跡を谷の南側の微高地頂部からやや下がったところで 2 棟（SH 0 1・0 2）と谷の北側で 1 棟（SH 0 3）検出した。



第 6 図 集石 1

## 第2節 遺構について

### 1. I区の遺構

I区では集石や土坑を検出したが、いずれもほぼ表土直下で検出したため、時期はよく分からぬ。集石についてはその形態から考えて縄文時代の可能性が高いと思われる。

#### 集石1（第6図）

集石1は、I-8・9区の微高地から北西へやや下がったところに位置する。石材は径2.9mの円形の広がりを持ち、拳大から人頭大の角礫、円礫600個以上を数える。断面を観察すると、石材はほぼ平坦に置かれている。石材に明瞭な被熱の痕跡を認められなかった。集石の下には、平面では確認できなかつたが、断面で幅2.4m、深さ21cmの土坑があり、最下層には黒ボク土が堆積していた。遺物は、遺構に明瞭に伴うかたちでは出土していない。

#### 集石2（第7図）

集石3は、I-8・9区の微高地から南東へやや下がったところに位置する。石材は径1.7m前後の円形の広がりを持ち、拳大から人頭大の角礫、円礫95個程度を数える。石材に明瞭な被熱の痕跡を認められなかった。集石の下では、地山面でわずかに浅い掘り込みを確認することができ、集石1と同様に土坑が存在するものと思われる。遺物は、遺構に明瞭に伴うかたちでは出土していない。

#### 集石3（第8図）

集石2は、I-8・9区の微高地から東へやや下がったところに位置する。径40cm前後の範囲に、径15cm前後の大きな礫4個を中心にして、径5cm前後の比較的小さな礫12個が周囲に配されている。石材に明瞭な被熱の痕跡を認められなかった。集石の下では、掘り込みなどを確認することができなかつたが、周囲に配されている小礫の底面レベルがやや高いことから考えて、やはり集石1と同様に土坑が存在するものと思われる。遺物は、遺構に明瞭に伴うかたちでは出土していない。

#### SK01（第9図）

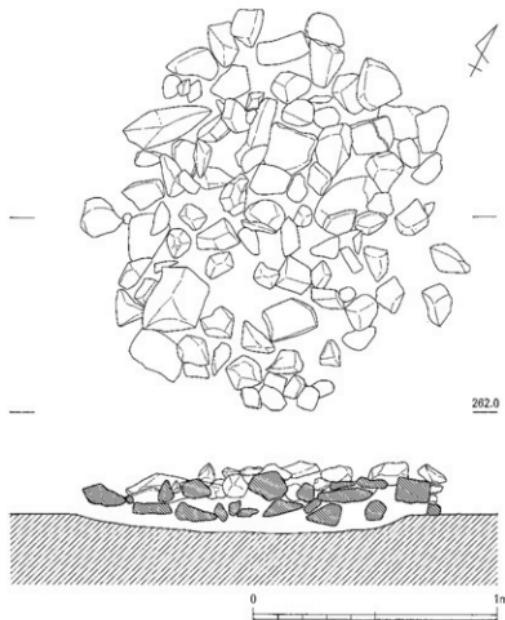
I-1A区に位置する。平面形は径75cm～63cm程度の楕円形で、径30cmの大礫1個と径10cm弱の礫7個が配されている。遺物は出土していない。

#### SK02（第10図）

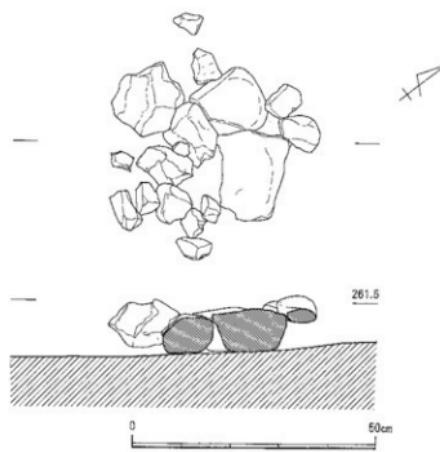
I-3A区に位置する。平面形は径2.8m～1.6m程度の楕円形で、径10cm程度の礫が20個配されている。遺物は出土していない。

#### SK03（第9図）

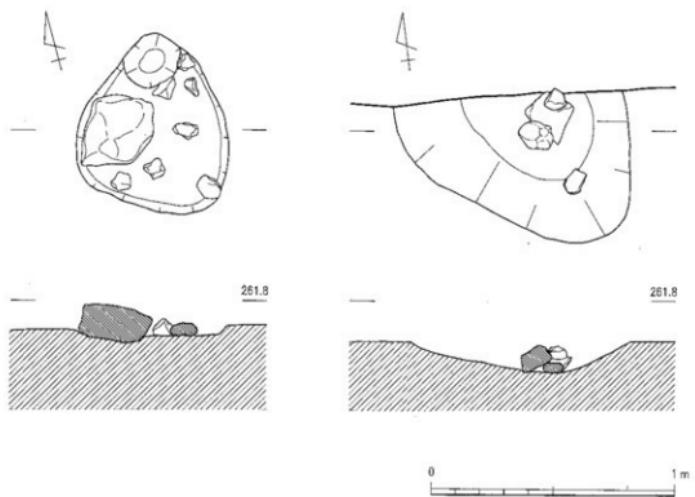
I-10C区に位置する。平面形は径90cm程度の不整円形で、土坑のほぼ中央部に径10～20cm程度の礫4個を配している。遺物は出土していない。



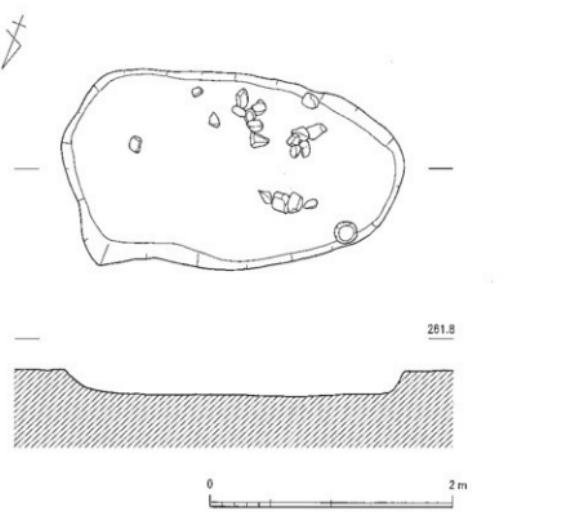
第7図 集石2



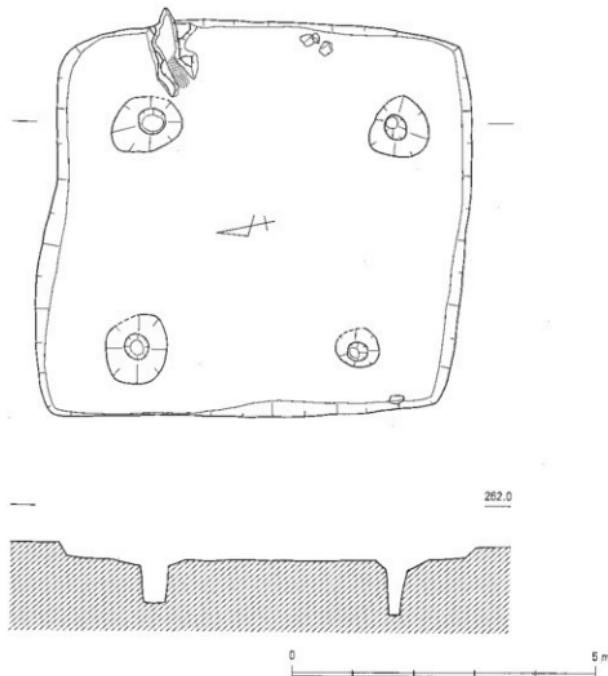
第8図 集石3



第9図 SK 01 (右)・0 3 (左)



第10図 SK 02



第11図 SH 0 1

## 2. II区の遺構

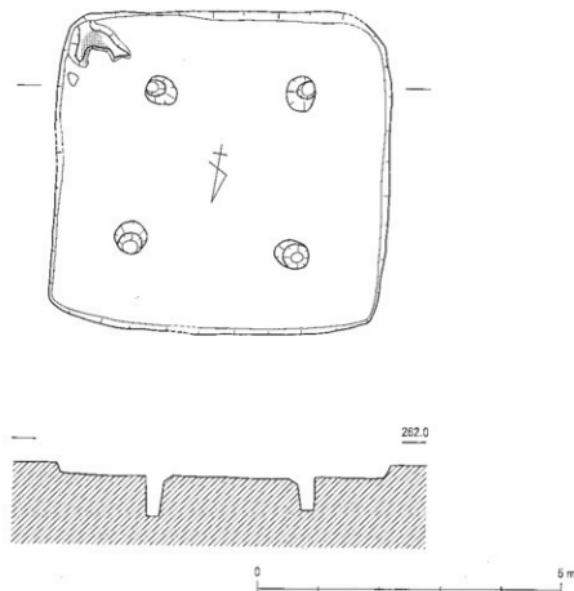
II区で検出された遺構は竪穴住居跡3棟である。いずれも方形で、約20mの間隔をあけて分布し、軸線はほぼ南北方向である。東に位置するものからSH 0 1・0 2・0 3と呼ぶことにする。

### SH 0 1 (第11図)

SH 0 1は6.4×6.0mを測り、西辺の北西隅よりに作りつけの竪を持つ。平面形はやや長方形気味の隅丸方形である。柱穴は4本あり、その掘り方直径は約40cmである。竪は細長い馬蹄形を呈した土手部分が認められ、焼土面・炭化物および焼土が存在していたが、支脚状のものは認められなかった。煙道は住居外に延びている。埋土中には土師器・須恵器などが含まれていたが、床面上には南辺に接して甕が1個体検出されただけである。

### SH 0 2 (第12図)

SH 0 2は5.0×5.0mで、隅丸方形を呈し、南西隅に作りつけの竪を持つ。柱穴は4本あり、その掘

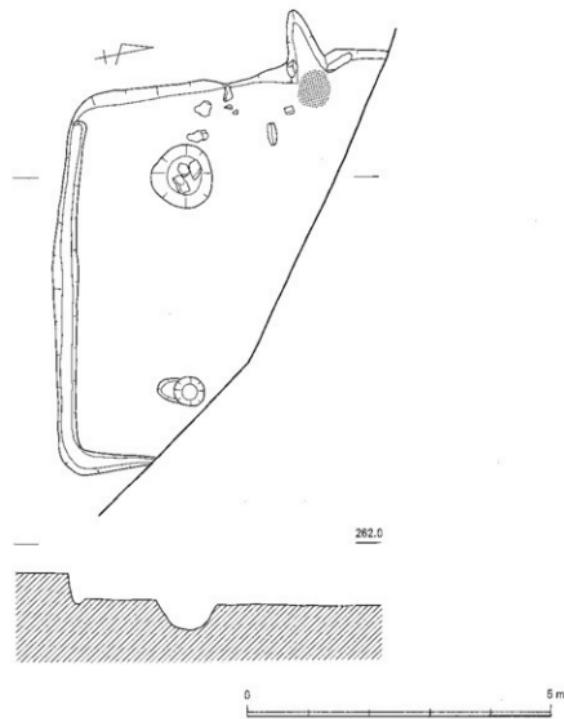


第12図 SHO 2

り方直径は約50cmである。埋土中には土師器片・須恵器坏身・坏蓋が含まれており、床面の遺物には土師器の塵が1点認められた。竈はSHO 1 のものと同様で、土手は馬蹄形を呈するようである。焼土面および焼土ブロック・炭化物が認められた。煙道は削平されているが、住居外に延びる可能性がある。支脚は認められなかった。

#### SHO 3 (第13図)

SHO 3 は一部が調査区外に存在するため、全容は不明だが、南辺は6mを測る。東辺から南辺には周壁溝が巡っている。柱穴のうち一つには板状の石塊が3枚根固め状に配されていた。西辺中央付近に作りつけの竈がある。他の住居に比べ、炭化物・焼土ブロックの存在は顕著ではないが、焼土面と住居外に延びる煙道の掘り込みが認められる。支脚として据えられていた可能性がある石塊がその周囲で見つかっている。遺物には土師器の甕、須恵器坏身、石製紡錘車1点が認められる。



第13図 SHO 3

### 第3節 遺物について

#### 1. 縄文時代の遺物

##### (1) 縄文土器

調査区内から約700点の縄文土器が出土している。土器は全て包含層から出土したもので、遺構に伴って出土したものはない。またそのほとんどが表土か表土直下の黒ボク土層から出土したため、層位的に取り上げることもできなかった。そのため、土器は主として外面における施文方法により以下の通り分類をおこなって報告する。

- I類 外面に押型文を施すもの
- II類 外面に縄文を施すもの
- III類 外面に条痕を施すもの
- IV類 外面に沈線を施すもの

V類 外面に刺突・沈線を施すもの

VI類 外面に突帯を施すもの

VII類 無文のもの

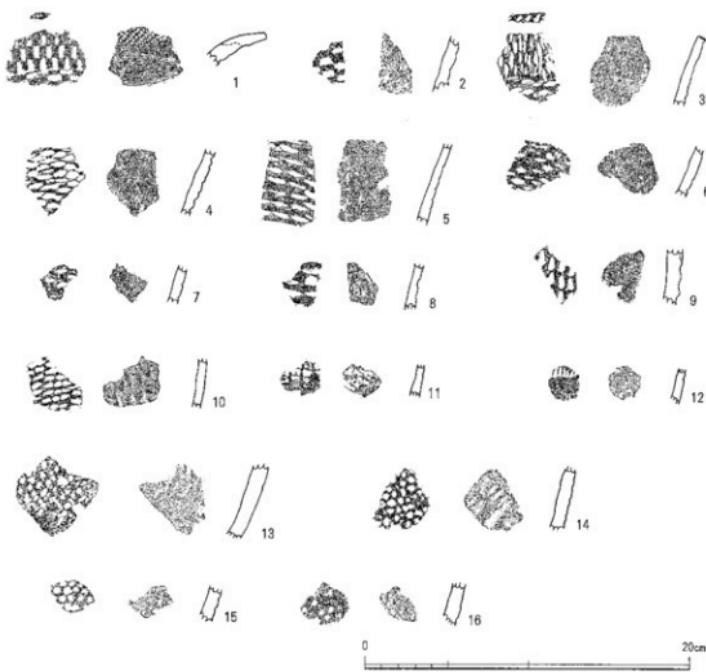
VIII類 外面の施文が不明瞭なもの

#### I類 押型文

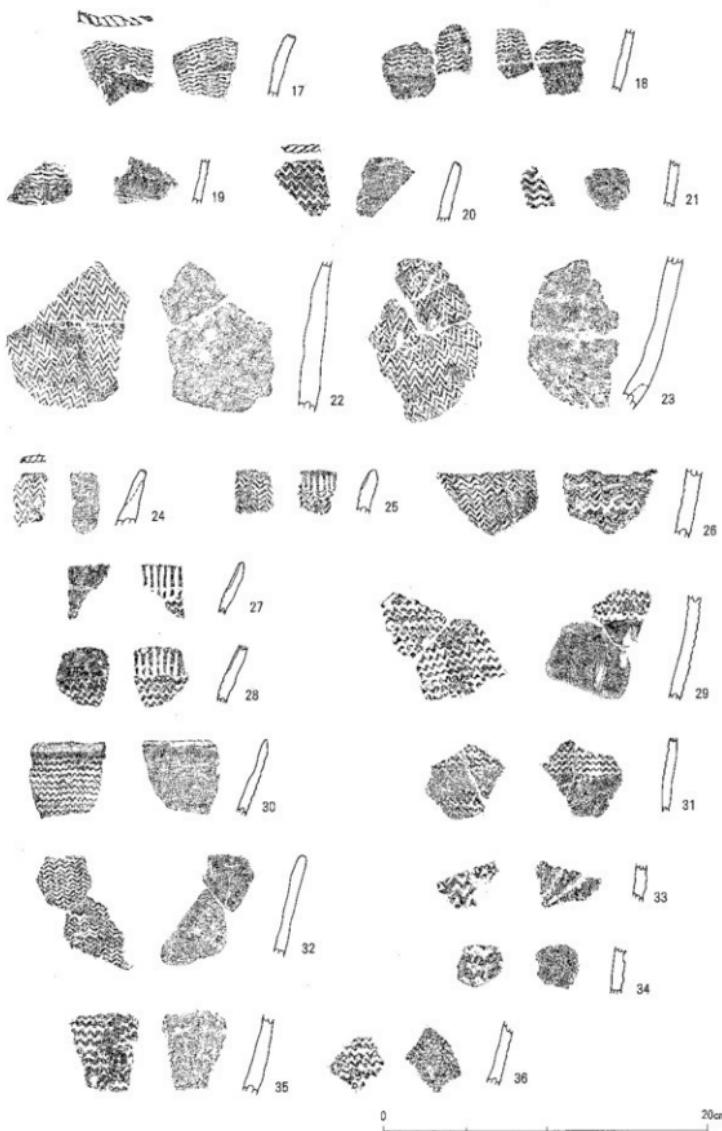
押型文は文様の種類によってネガティブ文のIA類、山形文のIB類、楕円文のIC類に分かれる。

##### IA類 ネガティブ押型文（第14図）

外面にネガティブ押型文を施すものである。内面の調整はナデを施している。器壁は5~9mmと比較的薄いものが多く、胎土に長石、黒雲母を含むものが多い。1~2は市松文様のネガティブ押型文を施すものである。1は口唇部と口縁部内面に細かい繩文を施している。3~7は船形の押型文を施すものである。3は口唇部に斜め方向のキザミを施している。8~10はやや形の崩れた長方形のネガティブ文である。11~12は長方形の間を広く溝を切った原体のネガティブ文である。13~16は正格子のネガティブ文を施したのち、粗いナデを施したものである。これらの土器は大川・神宮式に属し、そのなかでも



第14図 繩文土器（1）



第15図 繩文土器 (2)

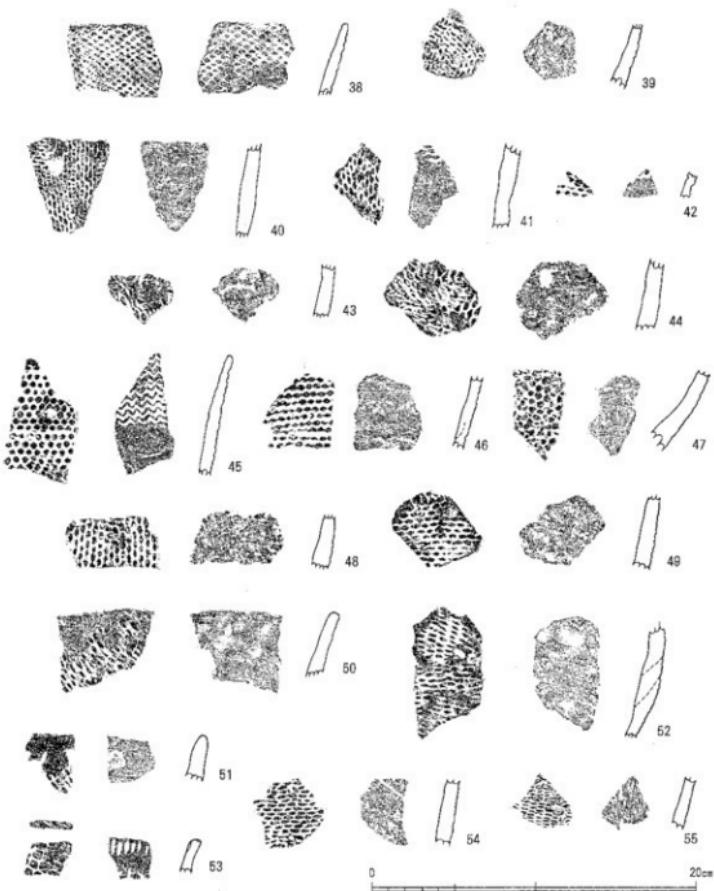


第16図 條文土器（3）

1～3は矢野編年による大川式新段階に相当する<sup>(3)</sup>。

#### I B類 山形押型文（第15・16図）

外面に山形押型文を施すものである。内面は押型文を施している部分を除いて、ナデを施している。口縁部は37を除き、直線的あるいはやや外反気味に開く。器壁は7mm前後のものが多く、比較的薄い。17～19は角度がゆるい山形文を施すもので、外面と口縁部内面に施文し、口唇部にキザミ目を施している。17は波状口縁を呈している。これらは、神並上層式に相当する。20～24は角度が急な山形文を施すもので、口唇部に斜め方向のキザミ目を施している。25・26はやや角度がゆるやかな山形文を施すもので、口縁部内面に山形文を施したのち、端部内面に原体条痕を施している。口唇部はケズリにより先を尖らせている。27～29は細かい山形文を施すものである。口縁部内面に山形文を施したのち、端部内面に原体条痕を施している。口縁部外面はナデを施している。30・31は細かい山形文を施すものである。30は口唇部および口縁部内面は施文されず、端部内外面を強くナデすることによって、口唇部を尖らせている。31は口縁部内面に山形文を施している。32はやや角度がゆるやかな山形文を施すもので、口唇部および口縁部内面に施文をおこなっていない。33～36はやや粗雑な山形文である。37は比較的良好な固体で直径32cmに復元できる深鉢である。口縁部は明瞭に屈曲して開き、口縁部内面の外反した部分に原体条痕を施している。体部内面上位は押型を横方向に転がし、外面は他の山形文の土器とは異なり、縱方向が多い不定方向の押型を施している。17～19の神並上層式以外のものは黄島式に相当する。

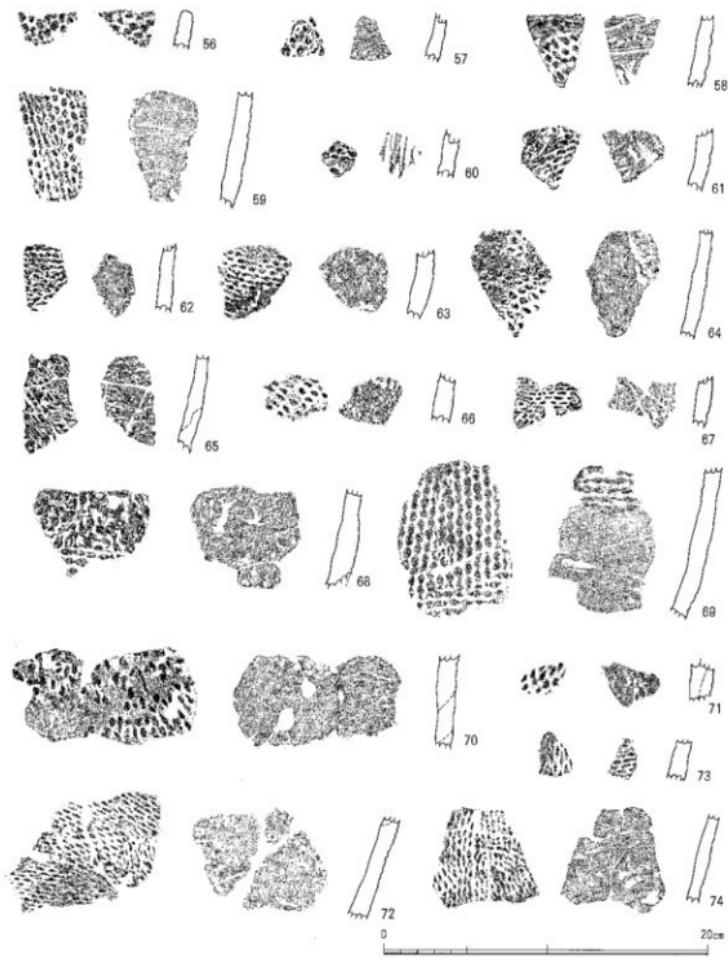


第17図 横文土器 (4)

I C類 横円押型文 (第17~21図)

外面に横円押型文を施すものである。内面は押型文や沈線を施している部分を除いて、ナデを施している。便宜上、横円の長径の大きさで大・中・小の3つに分けて説明する。

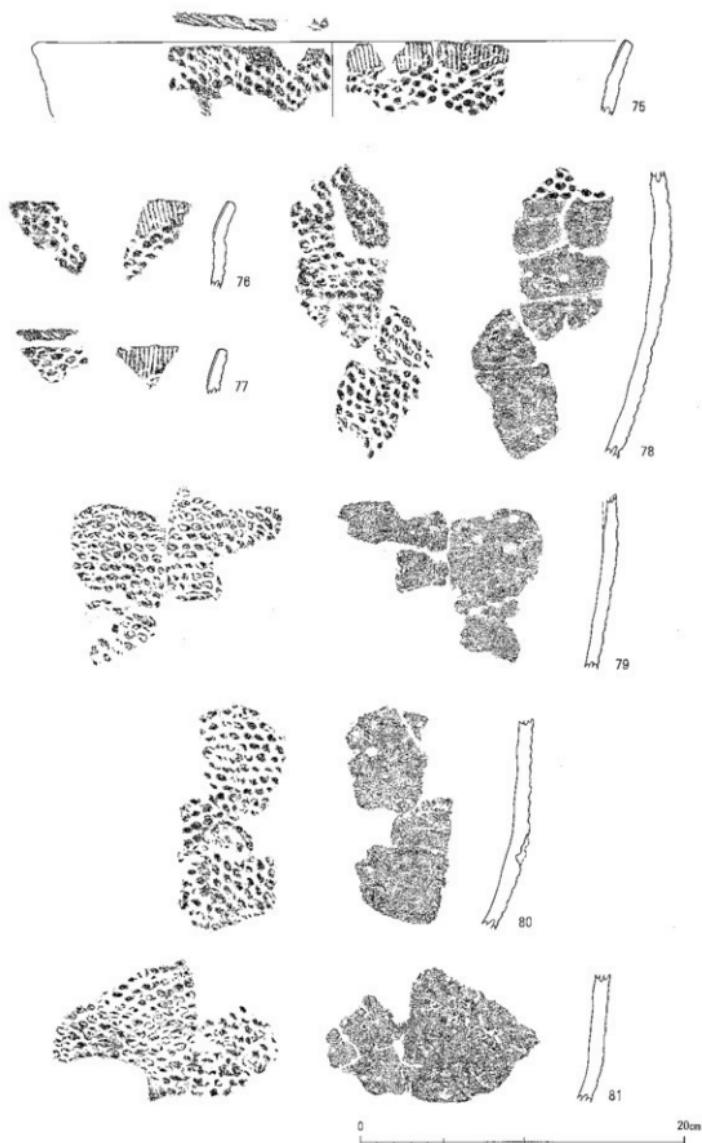
38~55は横円の長径が3~5mmと粒の大きさが小さいものである。口縁部は直線的あるいはやや外反気味に開く。38、45、50、51は口唇部に装飾を加えないが、53は口唇部に斜め方向のキザミを施し、口縁端部内面に幅の狭い原体条痕を施している。38、41、42、45は口縁端部内面に押型を横方向に施し、50、51、53は押型を施していない。45は外面と異なり山形文の押型を使用している。外面の押型も横方



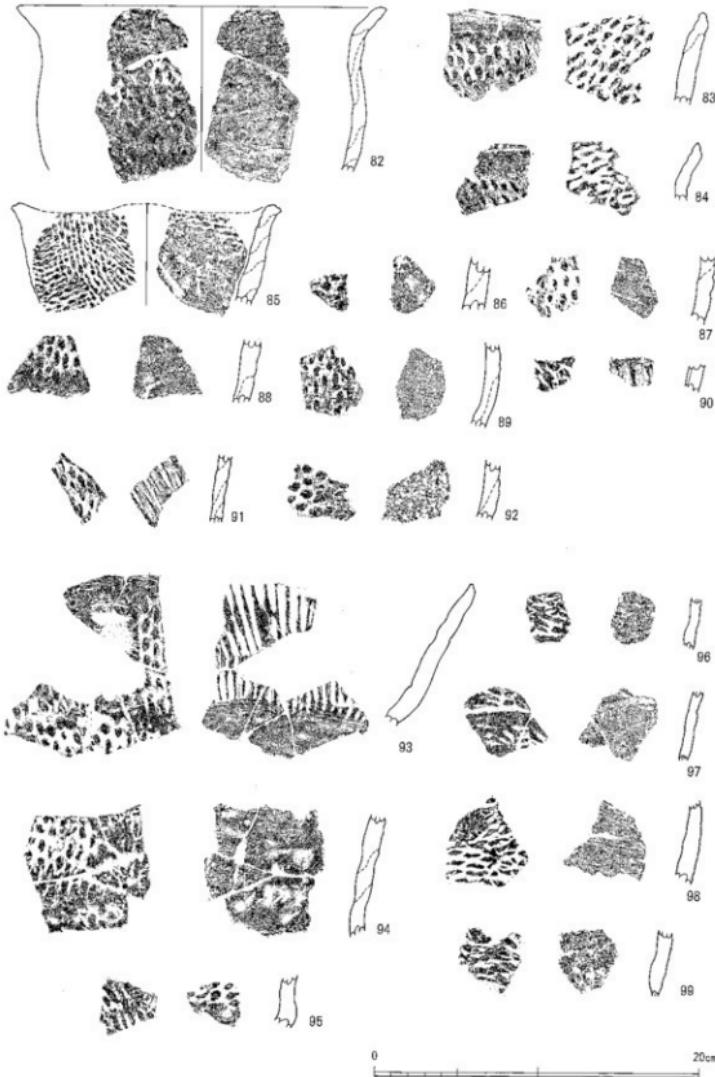
第18図 織文土器（5）

向に施文しているものが多い点は特徴的である。黄鳥式に並行するものと思われる。

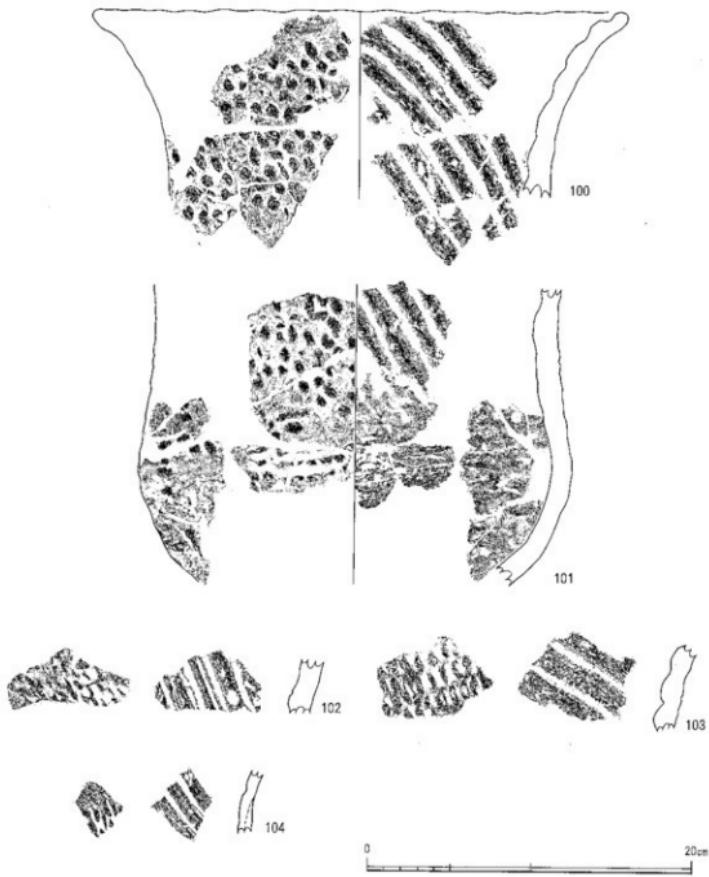
56~92は橢円の長径が6~8mmと粒の大きさが中くらいのものである。口縁部は直線的あるいはやや外反気味に開くものと口縁端部付近で比較的しっかり外反するものがある。56、82~85は口縁部に裝飾を加えない。75~77は口縁部に斜め方向のキザミを施し、口縁端部内面に原体条痕を施している。60、66も口縁端部内面に原体条痕を施している。90、91も原体条痕による斜行沈線を施している。口縁部内



第19図 楽文土器 (6)



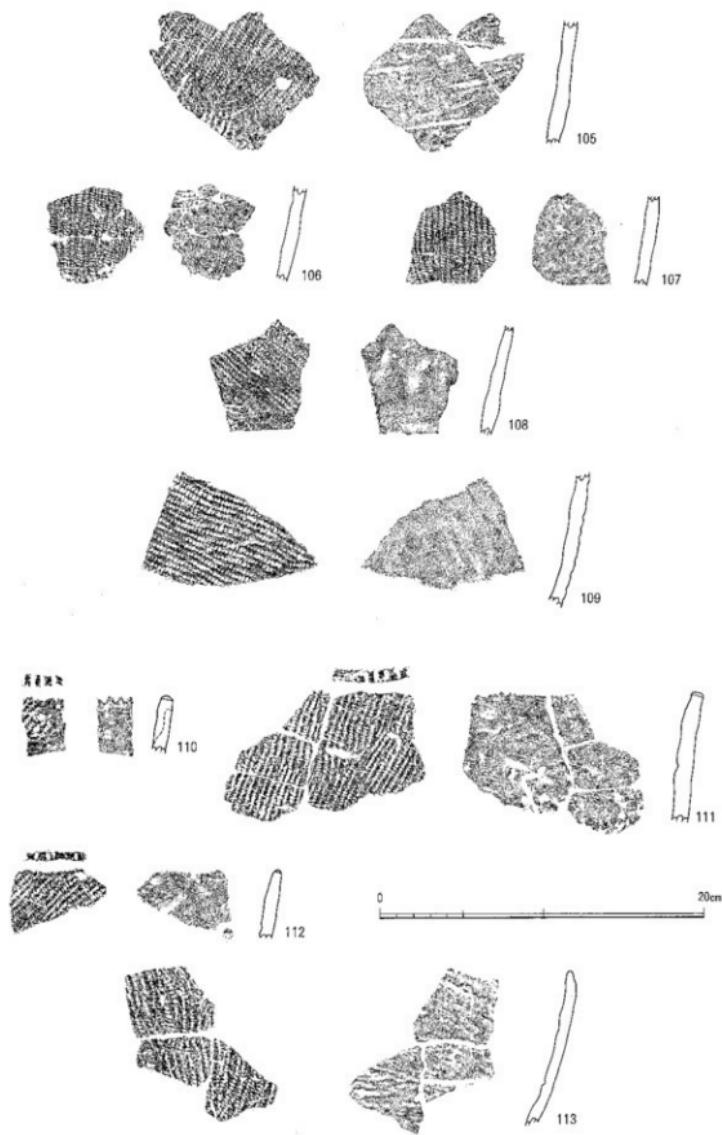
第20図 縄文土器（7）



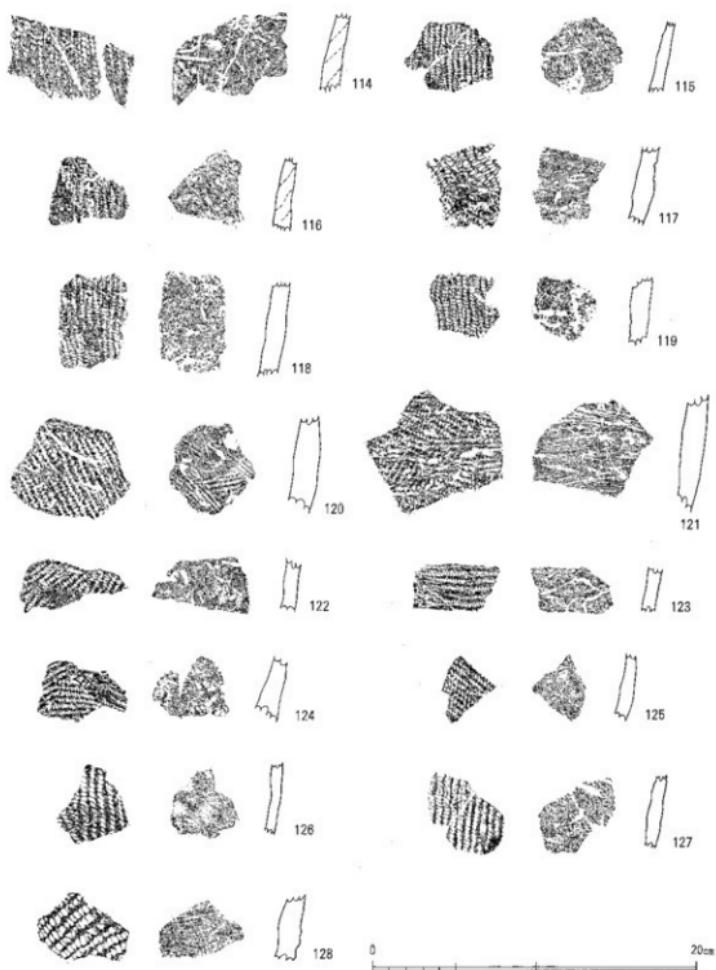
第21図 繩文土器 (8)

面に押型を横方向に施すもの（56、69、73、75、76、78、85）、押型を斜め方向に施すもの（83、84）、押型を施さないもの（82）がある。外面は84を除きほとんどが縦方向あるいは不定方向の施文である。70、82、84などのように押型を施したのち、ナデが施されたため押型が不鮮明なものがある。これらのものは黄島式の並行するものと考えられるが、一部に高山寺式のものを含む可能性がある。

93～104は楕円の長径が9 mm以上と粒の大きさが大きいものである。93・94は幅の広い原体条痕を施すもので、口縁端部外面にナデを施し、先端を尖らせている。95～99は細長い楕円押型文を施すものである。100、101は比較的良好な固体（同一固体）で、口縁部は大きく外反しながら開き、丸い底部を



第22図 桧文土器 (9)



第23図 織文土器 (10)

もつようである。口径は約30cm、口縁部固体と底部固体とに接点がないため不確実ではあるが、高さは24cm程度に復元できる。口縁部内面には12cmにわたって、断面が半円形の幅の広い斜行沈線が施されている。外面の押型文はナデによって不鮮明になっている。102~104も100・101と同様のものであるが、102の斜行沈線は断面が三角形になっている。これらのものは、黄島式並行(93~99)のものと高山寺

式（100～104）のものがある。

## II類 繩文

繩文は単節繩文とその他の特殊な繩文に分け、単節繩文のものは胎土中に纖維を含まないか少量含むものをII A類、纖維を比較的多く含むものをII B類とした。特殊な繩文はII C類（羽状繩文）、II D類（無節繩文）、II E類（表裏繩文）、II F類（撚糸文）、II D類（網目状撚糸文）に分類する。

### II A類 単節繩文（纖維なし・少量）（第22図）

105～109は外面に単節繩文を施し、胎土に纖維を含まないか、少量含むものである。体部破片のみで、口縁部、底部の形態は分からぬ。内面の調整はナデである。器壁は7～8mmと薄く、繩文のよりが細かい。

### II B類 単節繩文（纖維あり）（第22～24図）

110～145は外面に単節繩文を施し、胎土に纖維を比較的多く含むものである。口縁部は上方あるいはやや外方に直立するものが多く、136・137のようにやや外反するものがある。また、136は口縁が波状になっている。口唇部はキザミを施すもの（110～112）、繩文を施すもの（135～138）、加飾を加えなもの（143・145）などがある。内面の調整はナデのものが多いが、120・141・142のように条痕を施すものがある。これらの土器は宮ノ下式あるいは菱根式に相当するものと思われる<sup>(4)</sup>。

### II C類 羽状繩文（第25図）

146～158は外面に羽状繩文を施すものである。口縁部は上方に直立するもの（146）と外方にやや開くもの（147）がある。口唇部はキザミを施すもの（147）と繩文を施すもの（146）がある。147は口縁端部外面に押し引き沈線を施している。器壁は1cmを越えるものが多い。外面の繩文はほとんどのものが横方向に施文するが、146は縱方向に施文している。内面の調整はナデのものが多いが、条痕を施すもの（157）もある。胎土に纖維を含むものが多い。147は寄倉12層式、146は菱根式に相当するものと思われる。

### II D類 無節繩文（第25図）

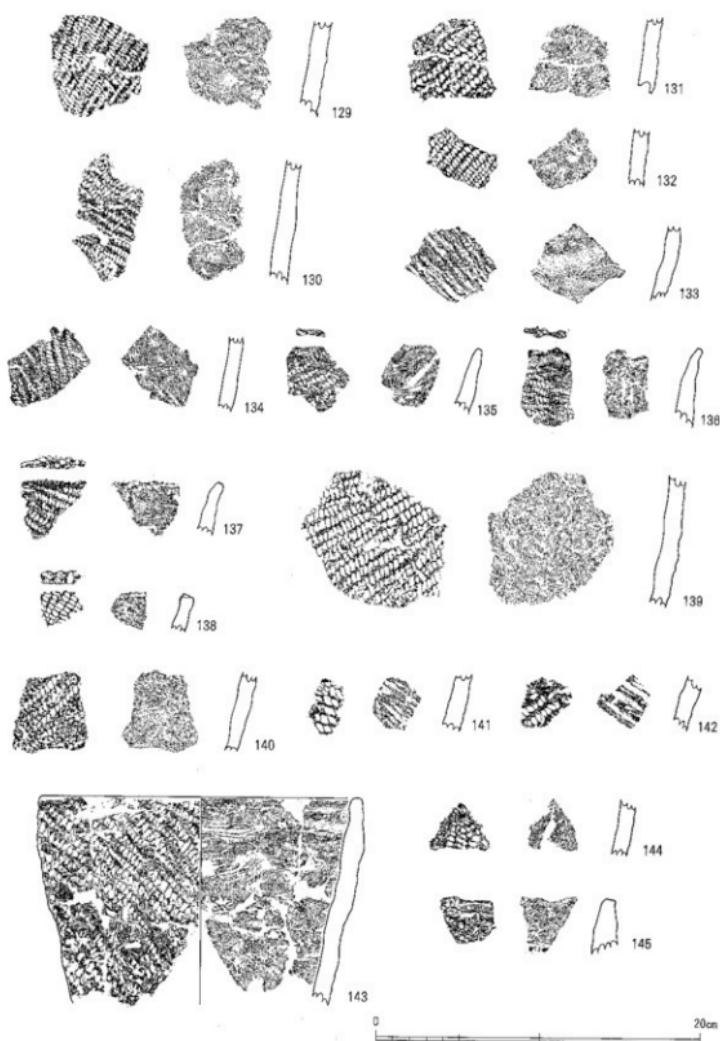
159・160は外面に無節繩文を施すものである。内面の調整は244がナデで、243が条痕である。胎土に纖維を含む。

### II E類 表裏繩文（第26図）

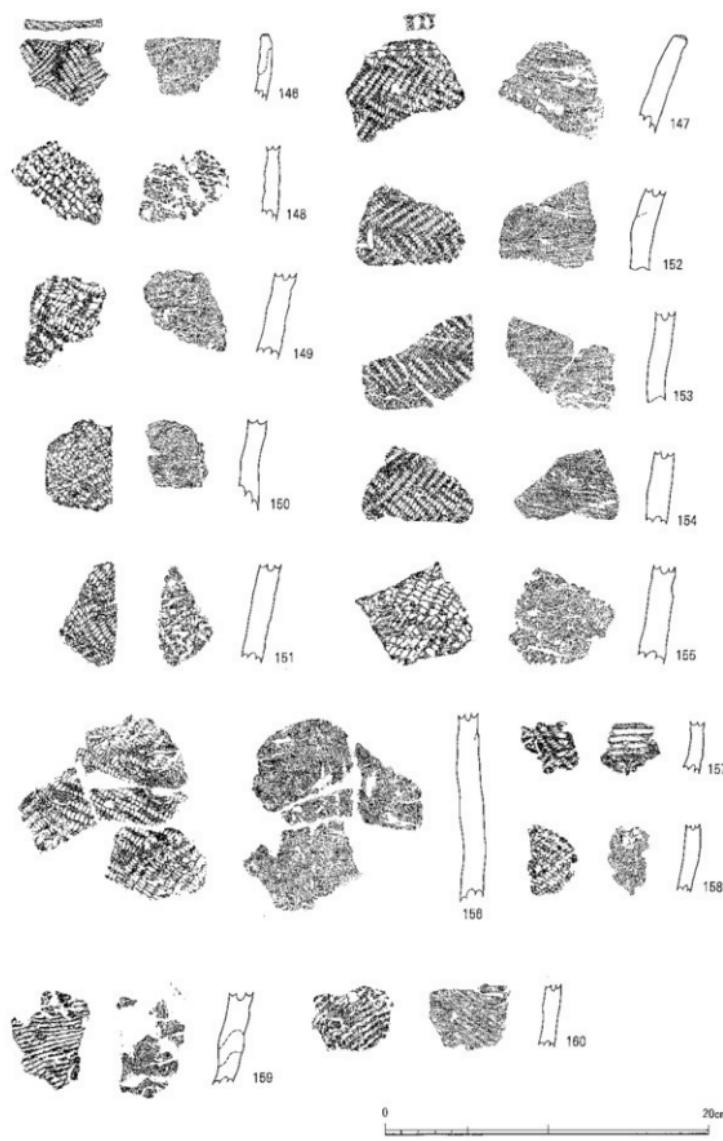
161～165は内外面に繩文を施すものである。口縁部（161）は比較的直立し、口唇部に繩文を施している。繩文のよりは比較的細かく、外面は繩文を施したのち、ナデを施しているものが多い。これらの土器は宮ノ下式あるいは菱根式に相当するものと思われる。

### II F類 撥糸文（第26図）

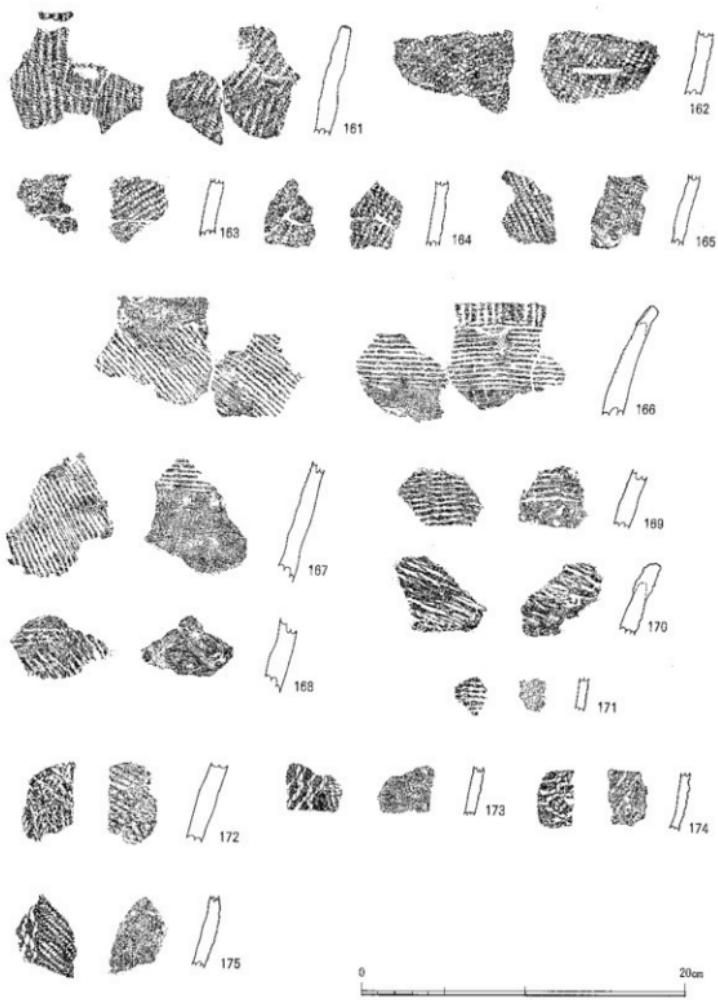
166～171は外面に撚糸文を施すものである。口縁部はやや外反しながら開く。外面は斜め方向に撚糸



第24図 縄文土器 (11)



第25図 織文土器 (12)



第26図 純文土器 (13)

文を施し、内面の調整はナデである。166は口縁端部内面に原体条痕を施し、その下位に燃糸文を横方向に施している。170は口縁端部内面に燃糸文を斜め方向に施している。166のように口縁端部内面に原体条痕を施すことから、黄島式並行のものと考えられる。

## II D類 網目状撚糸文 (第26図)

172～175は外面に網目状撚糸文を施すものである。172は網目状撚糸文を縦方向に施し、内面の調整は条痕で、器壁は11mmとやや厚い。173～175は網目状撚糸文を縦方向に施し、内面の調整はナデで、器壁は5～9mmと薄手である。南九州地方の平格式に類似する九州系の土器である<sup>(5)</sup>。

## III類 条痕文 (第27図)

176～184は外面に貝殻条痕を施すものである。内面は176が内面にナデを施しているのを除いて、条痕か、条痕を施したのち部分的にナデを施している。口縁部(176)は外上方に直立し、口唇部に加飾を加えていない。

## IV類 沈線 (第27図)

185～197は外面に沈線を施すものである。185は内外面とも横方向に浅く太い沈線を施したものである。186～194は多条沈線を縦方向に施すものである。口縁部(189)は外上方に直立あるいはやや内湾し、口唇部には加飾を加えていない。189は繩文を施したのちに沈線を施している。内面の調整はナデである。器壁は1cm以下で、胎土に纖維を含んでいる。195～197は格子状に沈線を施すもので、196・197は2条を組にして格子状にしている。内面の調整はナデを施している。器壁は厚く、胎土に纖維を含んでいる。174は潮見浩氏による纖維土器<sup>(6)</sup> Iに、251・252は南九州地方の塞ノ神式に類似する。

## V類 刺突、刺突+沈線 (第28・29図)

198～225は刺突を施すものや、刺突と沈線などを組み合わせて用いるものである。

198～200は表裏繩文の土器に刺突を施すものである。刺突は棒状の原体の端部を斜めに押しつけたものである。198ではやや尖り気味の口縁の端部外面に上向きの刺突が2列、199では上向きの刺突が1列、200では横向きの刺突が3列認められる。胎土に纖維を含んでいない。

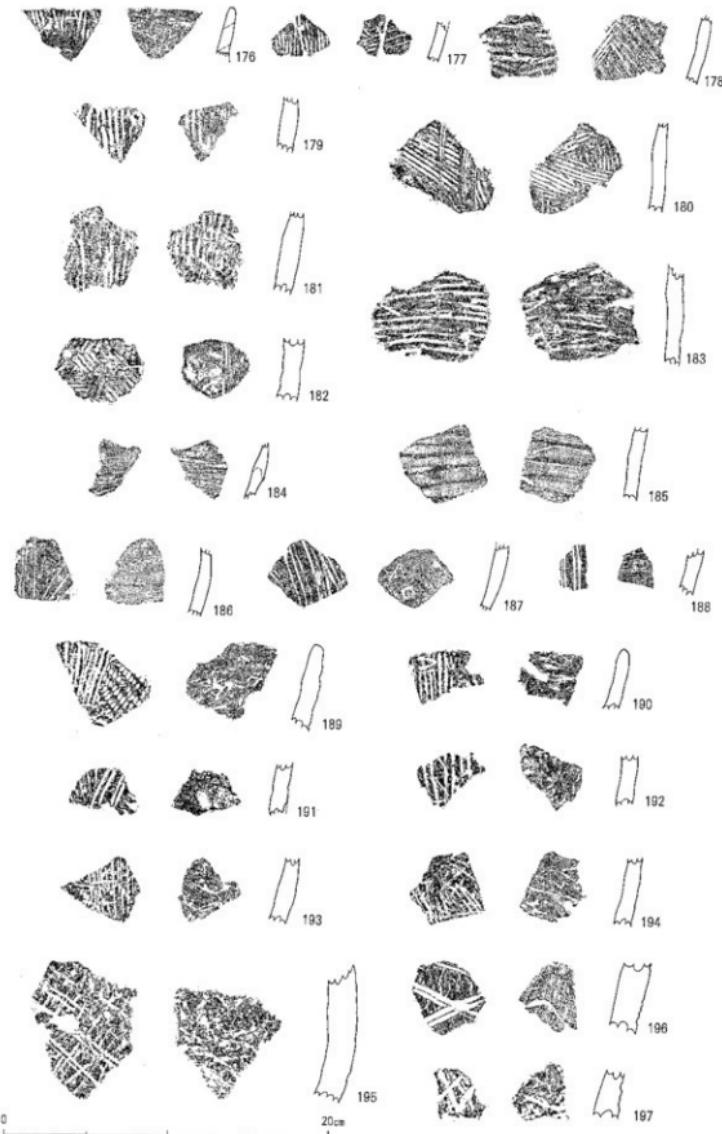
201は口縁端部外面に2・3列の押し引き刺突を施すものである。口縁部は波状口縁を呈し、口唇部にキザミを施している。体部外面には繩文を、内面には条痕を施している。胎土に纖維を含んでいる。202～206は隆帯や沈線によって区画を作り、その中を鱗状の刺突や沈線で埋めているものである。さらに隆帯などの交点に半截竹管状の刺突を施している。頸部で屈曲して口縁部を広げ、口縁部は上から見ると方形を呈しているようである。内面の調整は条痕が多く、271はナデである。胎土に纖維を含んでいる。関東地方の鞆ヶ島台式に相当する<sup>(7)</sup>。

207～209は繩文地に竹管状工具により沈線を施し、頸部の屈曲部に半截竹管状の刺突を施すものである。内面の調整はナデで、胎土に纖維を含んでいる。関東地方の茅山下層式に相当する。

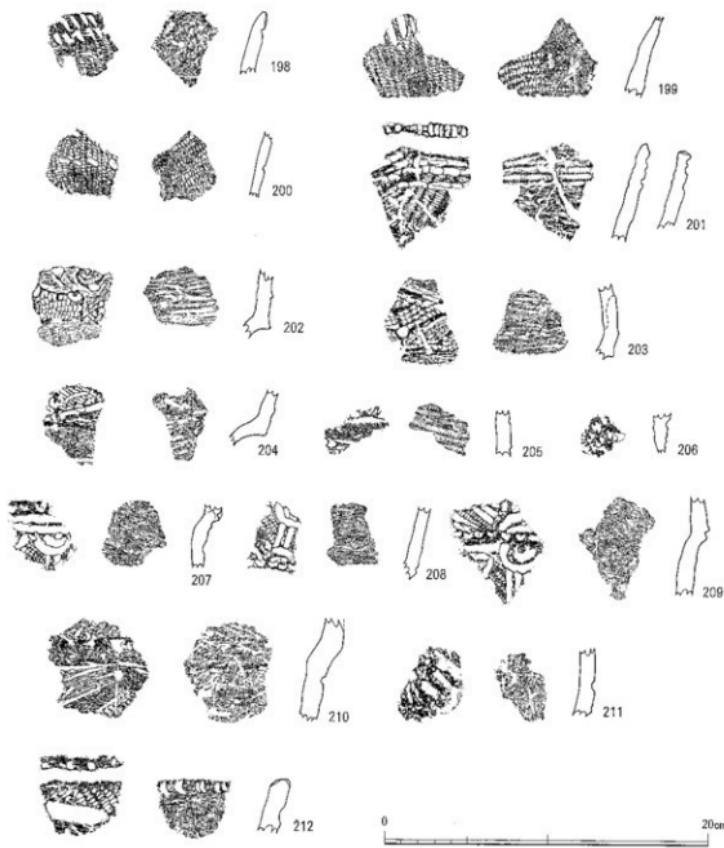
210は屈曲部下を沈線で区画し、その交点に刺突を施している。区画内には多条沈線が施されているが、271などのように埋めつくされているわけではない。屈曲より上にも多条沈線が施されているようである。内面の調整はナデで、胎土に纖維を含んでいる。202～209と同様に、関東系の土器と思われる。

198は209などのように屈曲部に半截竹管状の刺突を施すもので、その上部に斜め方向の沈線を施している。内面の調整はナデで、胎土に纖維を含む。202～209と同様に、関東系の土器と思われる。

212は外面繩文地に指頭状のもので太い沈線を施し、口縁端部内縫に三日月形の刺突を施すものである。口縁端部外縫にもキザミを施している。内面の調整はナデで、胎土に纖維を含んでいる。

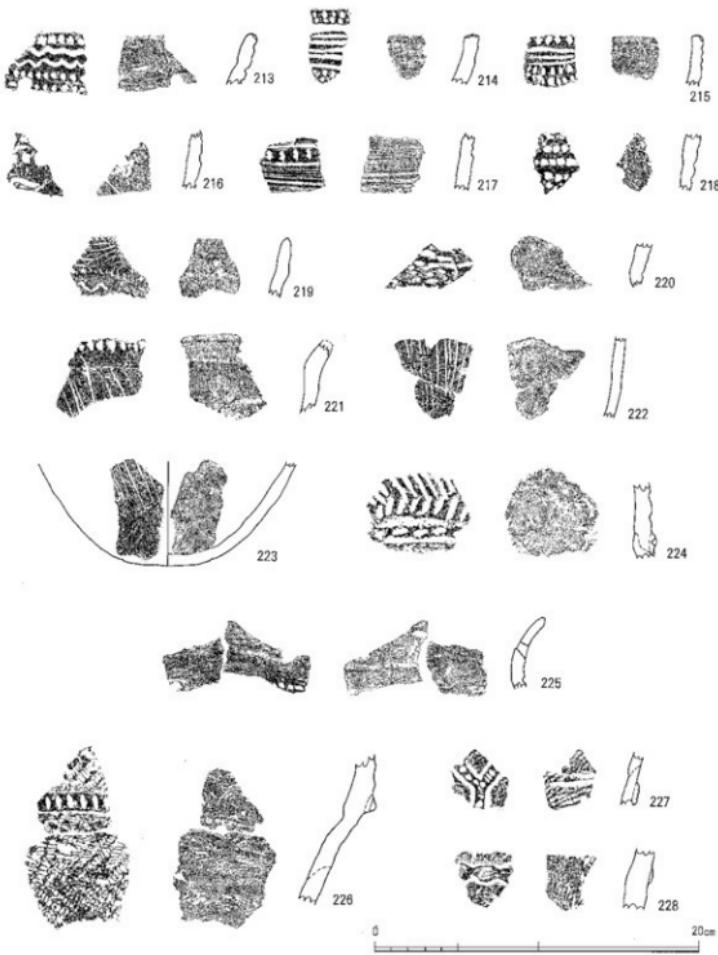


第27図 純文土器 (14)



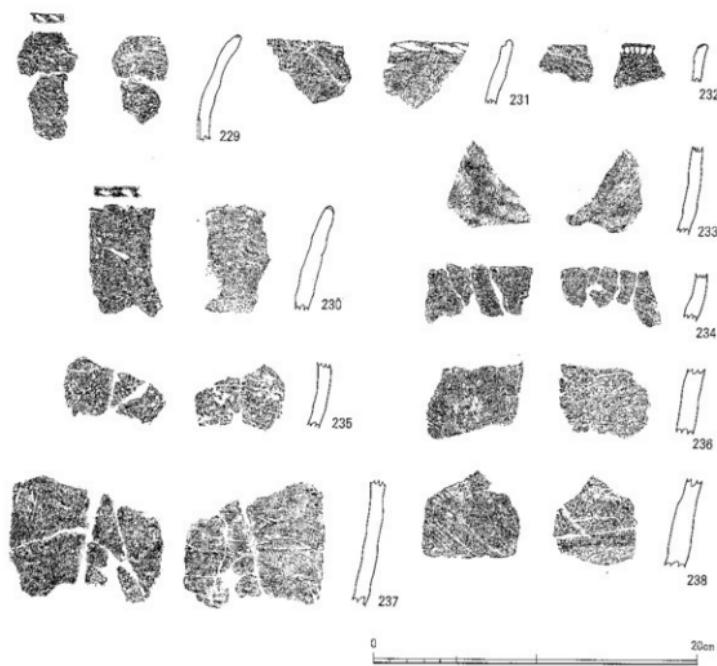
第28図 繩文土器 (15)

213～215はやや内湾しながら立ち上がる口縁部で、端部外面に沈線を数条横方向に施し、その下に三日月形や方形の刺突を横に2列以上施している。口唇部にも刺突を施している。216は三日月形の刺突と波状沈線、218は方形刺突列の部分のみの破片である。213～216、218の内面の調整はナデで、器壁は7～9mmと比較的の薄い。217、219、220は貝殻によって刺突を施すものである。217は横方向に施された条痕の間に貝殻による刺突列を施している。219は屈曲部に貝殻による刺突、口縁部に不定方向の沈線、頸部に波状沈線を施している。220は横方向に貝殻による刺突列を数条施している。内面の調整は219、220がナデ、217は条痕である。器壁は6～8mmと比較的の薄い。213・216は穿孔が施されている。213～220は九州系の土器と思われ、213～215・219は平格式に類似する。



第20図 横文土器 (16)

221～223は屈曲部に刺突を施し、その下位は多条沈線を底部近くまで施す。底部は丸底で、内面の調整はナデである。224は羽状沈線を横方向に施し、突帯にはななめのキザミを施す。突帯の下位に刺突を施している。内面の調整はナデである。平格式に類似する九州系の土器と思われる。209は外反する口縁で、やや先の尖った原体による刺突をもつ。穿孔が行われている。



第30図 繩文土器 (17)

#### VI類 突帯 (第29図)

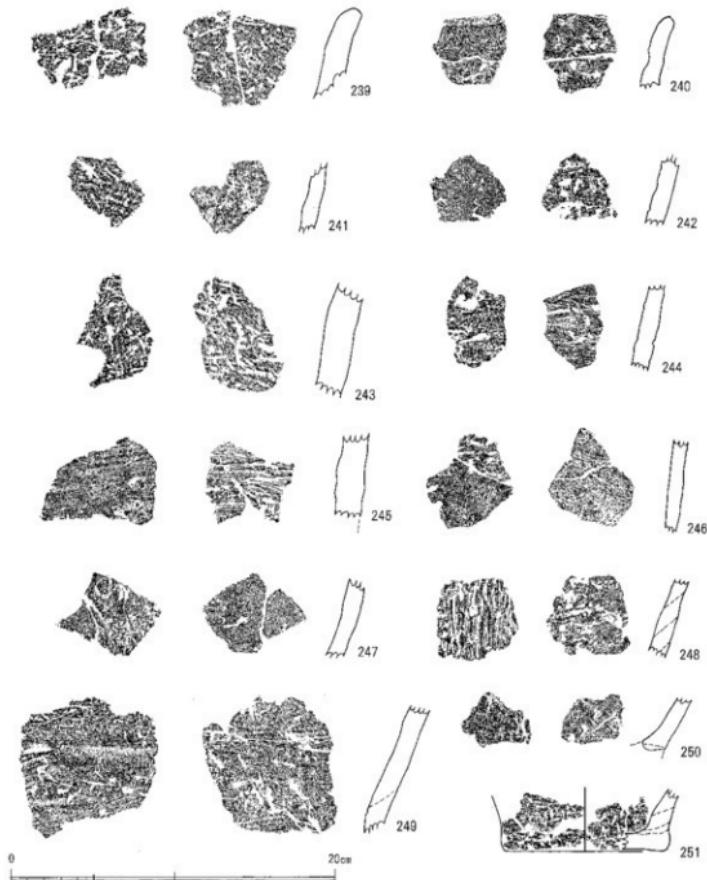
226～228は外面に突帯をもつものである。226は外面に羽状縄文を施した後にキザミ目のある突帯を施したものである。内面の調整はナデで、器壁は10mmである。胎土に纖維を含んでいる。228は表裏縄文に三叉に分かれたキザミ目のある突帯をもつものである。器壁は6mmと薄い。杉ヶ沢遺跡出土の長山式に類似する<sup>(8)</sup>。227は無文地にキザミ目のある突帯を施したものである。器壁は13mmと厚く、胎土に纖維を含む。

#### VII類 無文

外面に文様を施さないものである。そのうち胎土に纖維を含まないものをVIIA類、纖維を含むものをVIB類とする。ただし、このなかに有文土器の無文部分を含んでいる可能性は高い。

#### VIIA類 (第30図)

口縁部は外反するもの(229)と直線的に外上方にのびるもの(231～233)がある。229・230は口唇部に斜め方向のキザミ、231は口縁部内線に斜め方向のキザミ、232は口縁部内線に細かいキザミを施し

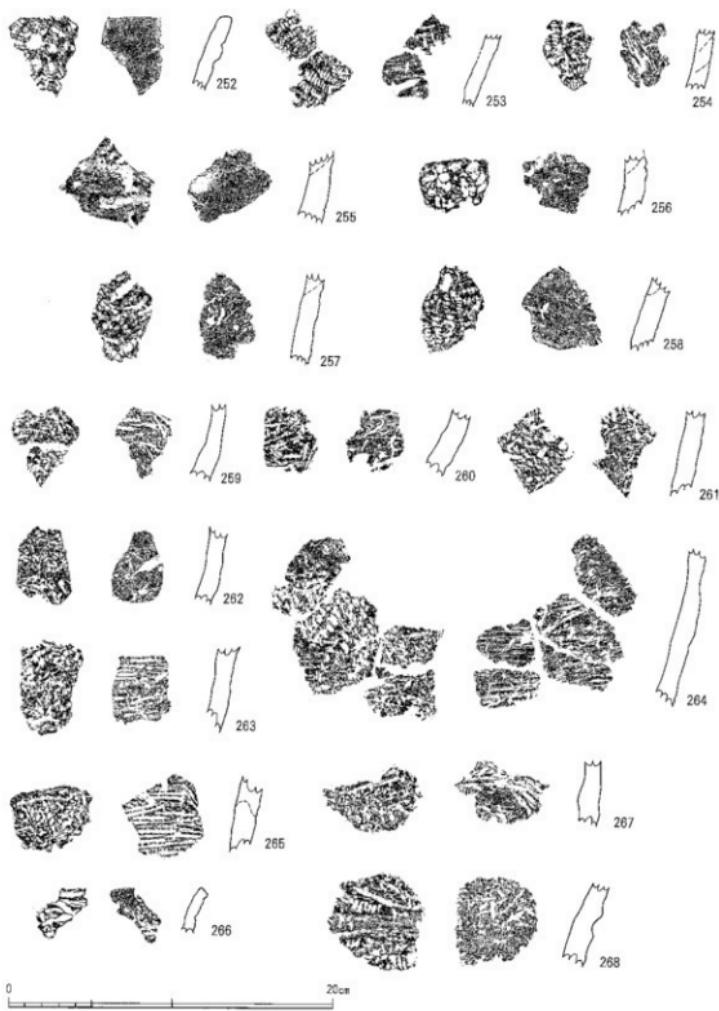


第31図 繩文土器 (18)

ている。内外面の調整はナデである。器壁は5~12mmのものがあるが、7mm前後の比較的薄いものが多い。

#### VII B類 (第31図)

口縁部(239、240)はやや外反気味で、端部はまるみをもっている。239は波状口縁を呈するようである。251は平底の底部である。内外面の調整はナデあるいは板ナデである。器壁は9mm以上で厚手のものが多い。



第32図 繩文土器 (19)

VII類 その他 (第32図)

表面に粗いナデや植物纖維状の工具による調整が施され、文様が不明瞭なため上記分類に含めなかつたものである。252～258は外面に縄文（252～254、258は羽状縄文）を施したのち、粗いナデを施して

いる。内面の調整は252、255～258がナデ、253、254が条痕である。胎土に纖維を多く含んでいる。259～267は外面に繩文を施したのち、纖維状の工具によって擦っている。内面の調整は260～262がナデ、259、263～265、267が条痕である。胎土に纖維を多く含んでいる。266は口縁部の破片で、外面に粗い沈線状のものが施されているが、小片のため文様かどうかはわからない。内面の調整はナデで、胎土に纖維を含んでいる。268は外面に繩文を施したのち、粗いナデを施している。さらに212と同様に指頭状のもので幅の広い沈線を施している。内面の調整はナデで、胎土に纖維を含んでいる。

#### 縄文土器の出土分布

縄文土器の大多数はI-3区からI-9区までの間に出土している。特に集石の検出された微高地先端部の周辺（I-7B、8B、9B区）での出土が特に多く、それに次いで、I-4、5A、5B、6B、II-0区などでの出土が多い。すなわち、舌状の微高地のすぐ南側に下がったところで集中的に出土し、I区の地形の低いところやII区の谷地形の中からはほとんど出土していない。微高地頂部の削平を受けている部分をのぞいては、その平面的な位置はそれほど動いていないと考えられる。分類毎の出土傾向については土器の出土している箇所が限られているため、時期や型式によってその差があるのかはよくわからない。

これらのことから考えると縄文人は微高地の頂部からそのすぐ南側の緩斜面にかけての部分を利用していたと推定される。

分類 地 区	I A	I B	I C 小	I C 中	I C 大	II A	II B	II C	II D	II E	II F	II G	III	IV	V	VI	VII A	VII B	VIII	合 計	
II 8																					
II 7																					
II 6		1														1				2	
II 5			1														1	1		3	
II 4																					
I 1																					
II 3								1							1			1		3	
I 2															1					1	
II 2			1																	1	
I 3		1	3	2			5	1							3	2	4	5	5	31	
II 1	1	1	4	2											1			1		10	
I 4		2	3	2			2	7							6	1	2	5	4	34	
II 0	1		3				1	1		1					1	3	2	1	8	22	
I 5A	1		5	2	1	1	3	2	1	2					2	1	1	10		7 39	
I 5B	1	11	5	29	1	1		1		1					1	1	4	3		59	
I 6A			2	2			3									3	2	1	2	15	
I 6B	5	2	10	6	4		5				1				1	1	1	3		1 40	
I 7A																		1		1	
I 7B	1	6	5	6	1	5	12	1		1					1	1	4	6	4	1 3 58	
I 8A	1	3					2													6	
I 8B	2	7	1	9	3	15	60		4		3	5	3	6	7	2	42	15	6	190	
I 9A					1	1					11							1	2		16
I 9B	3	16	2	11	69	4	5			2					2	3	9	1	1	128	
I 9C				5	1		1	1		1					1	1		2		13	
I 10A																					
I 10B																					
I 10C																	1			1	
合計	12	50	45	76	81	27	99	15	5	8	15	6	18	17	29	3	89	40	38	673	

第1表 繩文土器の出土位置

報告番号	分類	出土地区	器厚 (mm)	色調	胎土	備考
1	I A	I-8B	9	にぶい黄橙	長石(少)、黒雲母	
2	I A	I-7B	7	灰黃褐	長石、黒雲母	
3	I A	I-8A	6	橙	長石・黒雲母(少)	
4	I A	I-6B	7	灰黃褐	黒雲母(少)	
5	I A	I-9B	5	灰黃褐	長石、黒雲母(多)	
6	I A	I-6B	6	にぶい褐	長石、黒雲母	
7	I A	I-6B	6	にぶい褐	黒雲母	
8	I A	I-9B	5	灰黃褐	石英、長石、黒雲母(多)	
9	I A	I-8B	9	にぶい黄橙	石英(多)、長石、黒雲母	
10	I A	I-9B	5	にぶい黄橙	長石、金雲母、黒雲母	
11	I A	I-5B	5	黒褐	石英、長石、黒雲母(多)	
12	I A	I-6B	5	灰褐	長石・石英(少)	
13	I A	II-1	8	にぶい黄橙	石英・黒雲母(多)	
14	I A	I-5A	8	にぶい黄橙	石英(多)	
15	I A	I-6B	7	にぶい黄橙	石英・黒雲母(多)	
16	I A	II-0	8	にぶい黄橙	石英・黒雲母(多)	
17	I B	II-1	7	にぶい褐	長石(多)、石英	
18	I B	II-6	6	にぶい黄橙	長石、石英	
19	I B	I-5B	5	暗褐	石英	
20	I B	I-8A	6	にぶい褐	石英・長石(少)	
21	I B	I-8B	6	灰黃褐	長石(少)	
22	I B	I-8A	11	にぶい黄橙	石英、長石、纖維(少)	
23	I B	I-8B	9	橙	石英、長石、纖維(少)	
24	I B	I-8B	10	橙	石英、長石	
25	I B	I-4	8	にぶい黄橙	長石、石英	
26	I B	I-4	9	橙	長石、石英	
27	I B	I-5B	6	橙	長石、石英	
28	I B	I-5B	7	にぶい橙	長石、石英	
29	I B	I-5B	8	にぶい赤褐	長石	
30	I B	I-5B	6	橙	長石	
31	I B	I-9B	6	にぶい黄橙	長石・石英(多)	
32	I B	I-8B	6	浅黄	長石、石英	
33	I B	II-3	6	にぶい黄橙	長石、石英	
34	I B	I-5B	7	にぶい黄褐	長石(多)	
35	I B	I-9A	8	灰オリーブ	石英、長石	
36	I B	I-9B	6	浅黄	石英・長石(多)	
37	I B	I-9B	11	橙	長石・石英(多)	
38	I C	I-7B	7	にぶい橙	長石	
39	I C	I-4	8	にぶい黄橙	長石	

第2表 繩文土器一覧表(1)

報告番号	分類	出土地区	器厚 (mm)	色調	胎土	備考
40	I C	I-5B	9	にぶい黄橙	長石	
41	I C	I-7B	10	橙	長石(少)	
42	I C	II-5	5	浅黄	長石	
43	I C	II-0	8	明灰黄	長石	
44	I C	I-5B	10	にぶい黄橙	長石、纖維	
45	I C	II-1	8	浅黄	石英、長石	
46	I C	I-9B	7	にぶい黄橙	石英、長石	
47	I C	II-2	9	にぶい黄褐	長石、石英	
48	I C	I-6B	9	にぶい橙	石英、長石、纖維(少)	
49	I C	I-6B	9	にぶい橙	長石、石英	
50	I C	I-5B	8	にぶい黄橙	長石(少)、纖維	
51	I C	I-6B	10	にぶい黄橙	長石(少)、纖維	
52	I C	I-6A	12	にぶい黄橙	石英、長石、纖維(少)	
53	I C	I-5A	5	にぶい黄橙	石英、長石	
54	I C	I-3	8	にぶい黄橙	長石(少量)	
55	I C	I-8B	7	褐灰		
56	I C	I-7B	9	黒褐	長石、石英、黒雲母	
57	I C	I-5B	7	にぶい黄橙	長石(少)	
58	I C	I-7B	8	暗灰黄	長石	
59	I C	I-6A	10	にぶい黄橙	長石、石英、黒雲母	
60	I C	I-7B	9	にぶい黄褐	長石	
61	I C	I-5B	9	灰黄褐	長石	
62	I C	I-5A	8	にぶい黄橙		
63	I C	I-9B	11	にぶい黄橙	石英・長石(多)	
64	I C	I-6B	9	浅黄橙	石英・長石(多)	
65	I C	I-8B	9	にぶい黄橙	石英・長石(少)	
66	I C	II-1	11	にぶい黄橙	石英・長石(多)	
67	I C	II-1	9	にぶい黄橙	長石	
68	I C	I-4	12	にぶい黄橙	石英、長石、黒雲母	
69	I C	I-5B	10	にぶい黄橙	石英、黒雲母	
70	I C	I-9C	10	にぶい黄橙	長石、石英	
71	I C	I-9B	13	橙	長石、石英	
72	I C	I-5B	10	にぶい黄橙	石英(多)	
73	I C	I-9B	9	浅黄	長石	
74	I C	I-6B	7	にぶい黄橙	纖維(少)	
75	I C	I-5B	8	にぶい黄橙	石英、長石	
76	I C	I-5B	7	浅黄橙	石英、長石	
77	I C	I-5B	7	にぶい黄橙	石英(少)	
78	I C	I-5B	9	浅黄橙	石英、纖維(少)	

第3表 條文土器一覧表(2)

報告番号	分類	出土地区	器厚 (mm)	色調	胎土	備考
79	I C	I-5B	7	にぶい黄橙	石英、長石	
80	I C	I-5B	9	にぶい黄橙	石英、長石	
81	I C	I-5B	9	にぶい黄橙	長石・石英(多)	
82	I C	I-9C	8	にぶい黄橙	石英、長石	
83	I C	I-9C	10	櫻	長石、黒雲母	
84	I C	I-8B	7	にぶい黄橙	長石・石英(多)	
85	I C	I-7B	11	にぶい黄橙	石英(少)	
86	I C	I-6B	13	にぶい櫻	長石、黒雲母	
87	I C	I-7A	9	にぶい黄橙		
88	I C	I-7B	10	淡黄	石英、長石	
89	I C	I-8B	9	にぶい黄橙	石英、長石	
90	I C	I-8B	7	櫻	石英、長石	
91	I C	I-8B	7	にぶい黄橙	石英、長石、黒雲母	
92	I C	I-8B	9	灰白	石英・長石(多)	
93	I C	I-9B	9	浅黄橙	長石	
94	I C	I-9B	9	にぶい黄橙	長石	
95	I C	I-9B	10	にぶい黄橙	長石・石英・黒雲母(多)	
96	I C	I-9B	6	にぶい櫻	長石、石英、黒雲母	
97	I C	I-6B	5	にぶい櫻	長石、石英	
98	I C	I-7B	10	にぶい櫻	長石・石英・黒雲母(多)	
99	I C	I-9B	9	にぶい黄橙	長石・石英・黒雲母(多)	
100	I C	I-9B	13	にぶい黄橙	長石・石英・金雲母・黒雲母	
101	I C	I-9B	13	にぶい黄橙	長石・石英・金雲母・黒雲母	100と同一固体
102	I C	I-9B	12	にぶい黄橙	長石・石英・金雲母	
103	I C	I-8B	12	にぶい黄橙	石英(多)・金雲母	
104	I C	I-8B	7	にぶい黄橙	長石・石英・金雲母	
105	II A	I-9B	8	にぶい櫻	長石・石英・金雲母	
106	II A	I-8B	8	にぶい赤褐	長石・石英	
107	II A	I-5A	8	にぶい櫻	長石・石英	
108	II A	I-8B	7	にぶい黄橙	長石・石英・金雲母	
109	II A	I-8B	8	灰黄褐	長石・石英・黒雲母	
110	II B	I-8B	9	浅黄橙	長石・石英・纖維	
111	II B	I-8B	10	にぶい黄橙	長石・石英・纖維	
112	II B	I-8B	8	にぶい黄橙	長石・石英・纖維	
113	II B	I-8B	6	にぶい黄橙	長石・石英・纖維	
114	II B	I-7B	9	にぶい櫻	長石・石英・金雲母・纖維	
115	II B	I-7B	7	にぶい赤褐	長石・石英・纖維	
116	II B	I-6A	9	灰黄褐	長石・石英・纖維	
117	II B	I-3	10	灰黄褐	長石(少)・纖維	

第4表 繩文土器一覧表(3)

報告 番号	分類	出土 地区	器厚 (mm)	色調	胎土	備考
118	II B	I -3	11	にぶい黄橙	長石・石英(多)、繊維	
119	II B	I -4	11	灰黃褐	長石・石英(多)、繊維	
120	II B	I -5A	14	灰黃褐	長石(少)、繊維	
121	II B	I -8A	12	黃灰	石英・長石、繊維	
122	II B	I -8B	8	にぶい黄橙	長石・石英(少)、繊維	
123	II B	I -8B	8	浅黄橙	石英(少)、繊維	
124	II B	I -8B	11	浅黄橙	石英(少)、繊維	
125	II B	I -8B	8	灰黃褐	長石・石英、繊維(少)	
126	II B	I -8B	6	にぶい橙	石英・長石、繊維(少)	
127	II B	I -9B	7	にぶい黄橙	石英・長石、繊維(少)	
128	II B	I -9B	12	にぶい黄橙	石英・長石、繊維(少)	
129	II B	I -8B	10	灰黃褐	石英・長石(多)、繊維(少)	
130	II B	II -0	10	浅黄	石英・長石(多)、繊維	
131	II B	I -3	9	にぶい黄橙	石英(多)、繊維(少)	
132	II B	I -8B	9	にぶい黄橙	石英・長石(多)、繊維(少)	
133	II B	I -7B	8	浅黄橙	石英・長石(多)、繊維(少)	
134	II B	I -8B	8	浅黄橙	長石(少量)、繊維	
135	II B	I -6B	10	灰黃褐	石英・長石、繊維(少)	
136	II B	I -9B	10	にぶい黄褐	長石・繊維(少)	
137	II B	I -9C	8	にぶい黄橙	石英・長石、繊維	
138	II B	I -8B	7	にぶい黄橙	石英(多)、繊維(少)	
139	II B	I -5A	10	にぶい黄橙	石英・長石、繊維(多)	
140	II B	I -8B	9	にぶい黄橙	石英・長石、金雲母、繊維	
141	II B	I -4	10	にぶい橙	石英・長石、繊維(少)	
142	II B	I -7A	9	にぶい黄橙	長石・石英、繊維	
143	II B	I -8B	6	にぶい橙	金雲母、繊維	
144	II B	I -8B	9	褐灰	石英(多)、繊維	
145	II B	I -3	15	灰黃褐	長石(少量)、繊維	
146	II C	I -7B	7	暗灰黃	長石(多)、繊維(少)	
147	II C	I -4	12	黃灰	長石・石英、黑雲母、繊維	
148	II C	I -4	9	灰黃褐	繊維	
149	II C	I -5A	12	橙	石英・長石(少)、繊維	
150	II C	I -4	11	灰黃褐	石英・長石、繊維(少)	
151	II C	I -3	13	灰白	長石(多)、黑雲母、繊維	
152	II C	I -4	13	黃灰	長石・石英、黑雲母、繊維	
153	II C	I -4	10	浅黄	長石・石英、黑雲母、繊維	
154	II C	I -4	13	黃灰	長石・石英、黑雲母	
155	II C	II -3	14	にぶい黄橙	長石(少)、繊維	
156	II C	I -4	14	灰黄	長石、繊維	

第5表 繩文土器一覧表(4)

報告番号	分類	出土地区	器厚 (mm)	色調	胎土	備考
157	II C	I-5B	8	にぶい黄澄	長石(少)、纖維	
158	II C	II-0	9	にぶい黄澄	石英、纖維(少)	
159	II D	I-8B	13	黄灰	纖維	
160	II D	I-5A	8	にぶい橙	長石(少)、纖維	
161	II E	I-9B	10	にぶい黄澄	長石、石英	
162	II E	I-5A	8	灰褐	石英(多)	
163	II E	II-0	8	橙	石英(多)、黒雲母	
164	II E	I-5A	7	にぶい橙	石英	
165	II E	I-9C	7	にぶい黄澄	長石、石英、黒雲母	
166	II F	I-9A	12	明黄褐	長石・石英	
167	II F	I-9A	10	橙	長石	
168	II F	I-8B	11	灰黄	長石	
169	II F	I-6B	10	灰黄	長石	
170	II F	I-8B	10	にぶい黄澄	長石・石英	
171	II F	I-8B	5	にぶい黄澄	長石	
172	II G	I-8B	11	にぶい橙	長石、石英、纖維(少)	
173	II G	I-8B	8	にぶい黄澄	長石、黒雲母	
174	II G	I-7B	5	にぶい黄澄	長石(少)	
175	II G	I-8B	9	淡黄	長石、石英	
176	III	I-4	7	にぶい黄澄	長石、石英	
177	III	I-7B	6	にぶい黄褐	長石、石英	
178	III	I-4	6	灰黄褐	長石、石英	
179	III	I-8B	10	浅黄澄	石英、纖維	
180	III	I-8A	8	にぶい黄褐	長石、石英	
181	III	II-0	12	暗灰黄	長石	
182	III	I-3	11	灰黄褐	長石・石英(少)、纖維	
183	III	I-7A	9	にぶい橙	石英・長石、纖維	
184	III	I-4	6	灰黄褐	長石・石英(少)	
185	IV	I-5A	8	にぶい黄澄	長石・石英(少)	
186	IV	I-8B	7	灰黄褐	長石、石英	
187	IV	I-8B	8	灰黄褐	長石、石英	
188	IV	I-9B	8	にぶい黄褐	長石、石英	
189	IV	I-8B	10	灰黄褐	纖維	
190	IV	I-7B	8	にぶい黄澄	纖維	
191	IV	I-8B	10	にぶい黄澄	長石・石英(多)	
192	IV	I-6B	10	にぶい橙	纖維	
193	IV	I-8B	10	淡黄	纖維	
194	IV	I-7B	9	にぶい黄澄	長石(少)、纖維	
195	IV	I-5B	17	にぶい橙	石英・長石、纖維	

第6表 繩文土器一覧表(5)

報告番号	分類	出土地区	器厚 (mm)	色調	胎土	備考
196	IV	II-8	17	灰黄褐	長石、石英、金雲母、纖維	
197	IV	II-0	13	にぶい黄橙	纖維	
198	V	II-0	8	にぶい黄橙	長石(少)	
199	V	I-9B	10	にぶい黄橙	長石、石英、金雲母	
200	V	I-5A	5	にぶい橙	石英	
201	V	I-3	8	灰黄褐	石英(少)、纖維	
202	V	II-0	8	淡黄	長石、石英、纖維	
203	V	I-6B	8	橙	長石、石英、纖維	
204	V	I-3	8	明黄褐	石英(少)、纖維	
205	V	I-5A	8	黑褐	長石(少)	
206	V	I-6A		黄灰	纖維	
207	V	I-7B	8	灰黄	長石、纖維	
208	V	I-7B	8	浅黄	長石、纖維(少)	
209	V	I-6A	10	黑褐	長石、石英、纖維	
210	V	II-1	12	にぶい橙	長石、石英、金雲母、纖維	
211	V	I-7B	10	にぶい黄褐	纖維	
212	V	I-5B	12	灰黄	石英・長石(多)	
213	V	I-8B	8	灰黄褐	長石、石英	
214	V	I-9B	9	にぶい橙	長石、石英、黑雲母	
215	V	I-9B	7	浅黄橙	長石	
216	V	I-8B	9	灰黄褐	長石	
217	V	I-7B	8	橙	長石、黑雲母	
218	V	I-5B	9	灰黄褐	長石(多)	
219	V	I-8B	7	浅黄橙	長石(多)	
220	V	I-8B	6	にぶい黄橙	長石、黑雲母	
221	V	II-0	9	灰黄褐	長石、石英	
223	V	I-8B	7	にぶい黄橙	長石	
224	V	I-7B	10	灰黄	長石・石英(多)	
225	V	I-8B	7	浅黄橙	長石、石英	
226	VI	I-4	10	にぶい褐	石英(少)、纖維	
227	VI	I-8B	6	にぶい褐	石英	
228	VI	I-8B	13	にぶい橙	石英、長石、纖維	
229	VII A	I-8B	7	灰黄褐	長石(少)	
230	VII A	I-8B	9	にぶい橙	石英	
231	VII A	I-9B	7	浅黄橙	長石・石英(多)	
232	VII A	I-9B	5	にぶい黄橙		
233	VII A	I-8B	7	にぶい黄褐	長石、石英	
234	VII A	I-8B	7	灰褐	長石	

第7表 繩文土器一覧表(6)

報告番号	分類	出土地区	器厚 (mm)	色調	胎土	備考
235	VII A	I-8B	7	にぶい橙	石英、黒雲母	
236	VII A	I-8B	10	にぶい黄橙	石英、黒雲母	
237	VII A	I-5B	8	にぶい橙	長石(少)	
238	VII A	I-9B	12	浅黄橙	長石・石英(多)	
239	VII B	I-6A	14	淡黄	長石、繊維	
240	VII B	I-9A	10	浅黄	長石(少)、繊維	
241	VII B	I-8B	9	にぶい黄橙	石英・長石(多)、繊維	
242	VII B	I-8B	11	にぶい橙	石英、繊維	
243	VII B	I-7A	17	浅黄	長石、石英、黒雲母、繊維	
244	VII B	II-2	11	暗灰黄	石英、長石、黒雲母、繊維	
245	VII B	II-0	17	橙	長石、石英、繊維	
246	VII B	I-8B	9	黄褐	長石、金雲母、繊維	
247	VII B	I-5B	9	にぶい黄橙	長石、金雲母、繊維	
248	VII B	I-7B	11	にぶい橙	繊維(多)	
249	VII B	I-5B	12	にぶい黄橙	石英、長石、黒雲母、繊維	
250	VII B	I-8B	9	浅黄	長石、石英、繊維	
251	VII B	I-4	10	黄橙	石英、長石、繊維	
252	VII	I-3	10	褐灰	繊維	
253	VII	I-8B	8	にぶい黄橙	繊維	
254	VII	I-6A	10	灰黄褐	繊維	
255	VII	I-5A	13	灰黄褐	長石、石英、繊維	
256	VII	I-5A	12	にぶい黄橙	繊維	
257	VII	I-7B	11	にぶい黄褐	長石、繊維	
258	VII	I-3	12	黄灰	長石(少)、繊維	
259	VII	I-5A	9	にぶい黄橙	石英、黒雲母、繊維	
260	VII	I-7B	12	にぶい橙	繊維	
261	VII	I-4	12	にぶい橙	金雲母、繊維	
262	VII	I-6A	9	黄灰	繊維	
263	VII	II-5	10	灰黄	繊維	
264	VII	I-5A	11	灰黄褐	長石	
265	VII	II-0	13	にぶい黄橙	石英(少)、繊維	
266	VII	I-6A	6	にぶい橙	繊維	
267	VII	II-0	11	灰黄	長石、繊維	
268	VII	I-3	13	暗灰黄	長石・石英(多)、繊維	

第8表 繩文土器一覧表(7)

(2) 石器 (第33~36図)

調査区内から約40点の石器が出土している。石器も土器と同様、全て包含層から出土したもので、遺構に伴って出土したものはない。このうち有舌尖頭器、スクレイバー、楔形石器、使用痕のある剥片、二次加工のある剥片、叩石、磨石などを図示し、それ以外にチャート製の石核、安山岩製の使用痕のある剥片、凹石、叩石、安山岩・黒曜石製の剥片、水晶の原石などが出土している。この地点ではかつて石礫が表採されたという報告がなされているが、今回の調査では出土していない。

有舌尖頭器 (269) 逆三角基式の有舌尖頭器で、尖端を折損している。刃部を裏裏面から調整を行っているが、1側縁に自然面を残している。他の石器とは石材が異なり凝灰岩である。

スクレイバー (270~273) 270~272は外反する刃部に裏裏面から調整を行ったもので、片面に自然面を残している。273は外反する刃部に裏面から調整を行ったもので、1側面に自然面を残している。厚28.4mmと厚い。これらの石材は全て安山岩である。

楔形石器 (274~280) 274はやや大型で、周縁をほぼ全て利用し、275、276、279、280には剪断面が認められる。これらの石材は280がチャート製である以外は、安山岩製である。

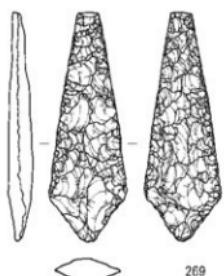
使用痕のある剥片 (281、282) 1側縁に刃こぼれが認められる。

二次加工のある剥片 (283) 周縁のほとんどの部分に背面から調整を加えている。

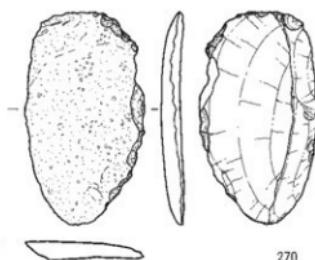
叩石、磨石 (286、287) 側面が平滑にされ、287には敲打痕が認められる。

報告番号	器種	石材	出土地区	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
269	有舌尖頭器	凝灰岩	II-4	70.9	24.0	7.6	9.7
270	スクレイバー	安山岩	I-5 A	75.8	36.5	7.0	15.4
271	スクレイバー	安山岩	I-3	56.1	31.2	9.2	16.1
272	スクレイバー	安山岩	I-8 A	60.9	41.8	9.0	21.6
273	スクレイバー	安山岩	I-4	73.9	78.1	28.4	157.4
274	楔形石器	安山岩	I-9 C	69.9	69.2	10.1	44.1
275	楔形石器	安山岩	II-1	32.6	38.9	8.1	12.9
276	楔形石器	安山岩	I-5 B	58.6	40.8	10.0	31.4
277	楔形石器	安山岩	I-7 B	35.6	27.9	6.1	4.7
278	楔形石器	安山岩	I-9 B	35.2	29.0	5.7	4.7
279	楔形石器	安山岩	II-2	40.8	18.3	7.8	5.3
280	楔形石器	チャート	I-1	30.0	19.8	6.0	1.7
281	使用痕のある剥片	安山岩	II	65.1	37.8	11.3	19.7
282	使用痕のある剥片	安山岩	I-9 B	38.1	33.8	7.3	12.2
283	二次加工のある剥片	安山岩	I-8 B	75.0	50.8	10.5	34.8
284	石核	安山岩	II-1	80.3	56.0	31.8	128.4
285	剥片	安山岩	II-5	50.4	57.9	9.2	20.7
286	磨石	砂岩	II	95.0	80.2	56.2	639.2
287	叩石	砂岩	II	58.4	58.9	41.8	210.4

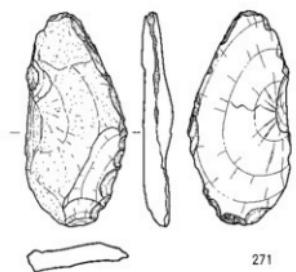
第9表 石器一覧表



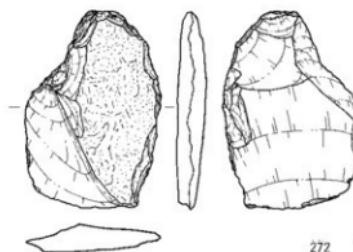
269



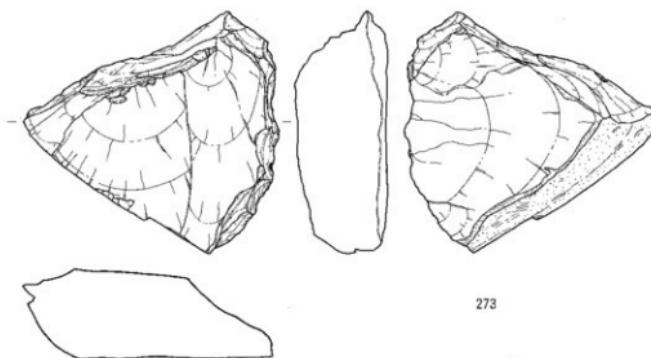
270



271



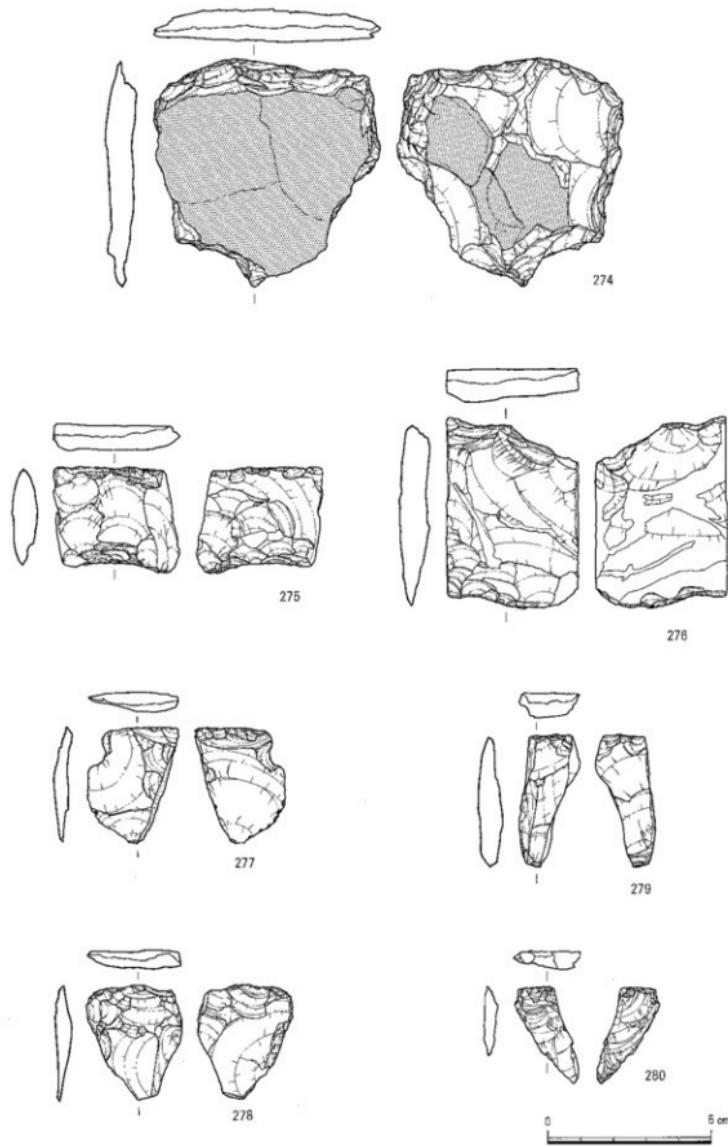
272



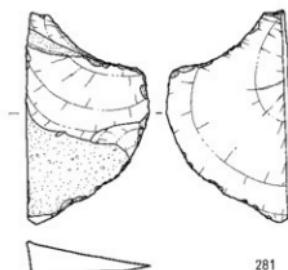
273



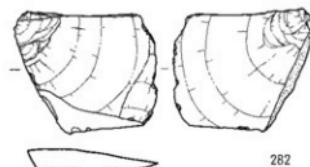
第33図 石器 (1)



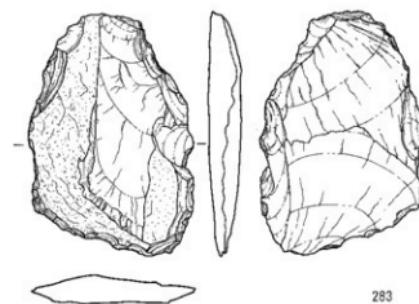
第34図 石器（2）



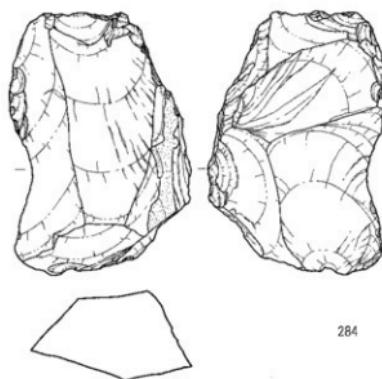
281



282



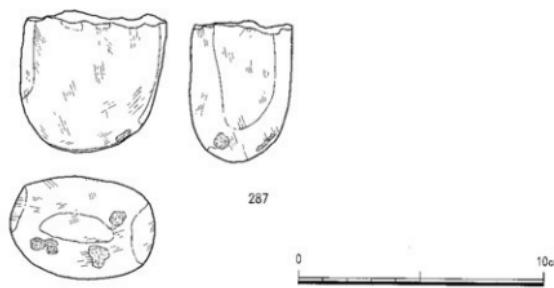
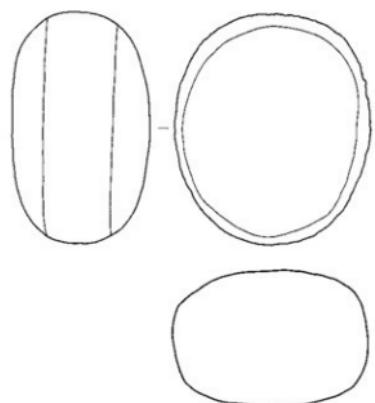
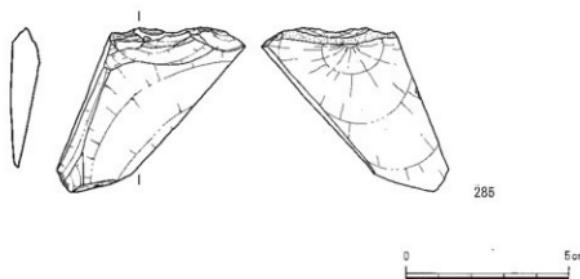
283



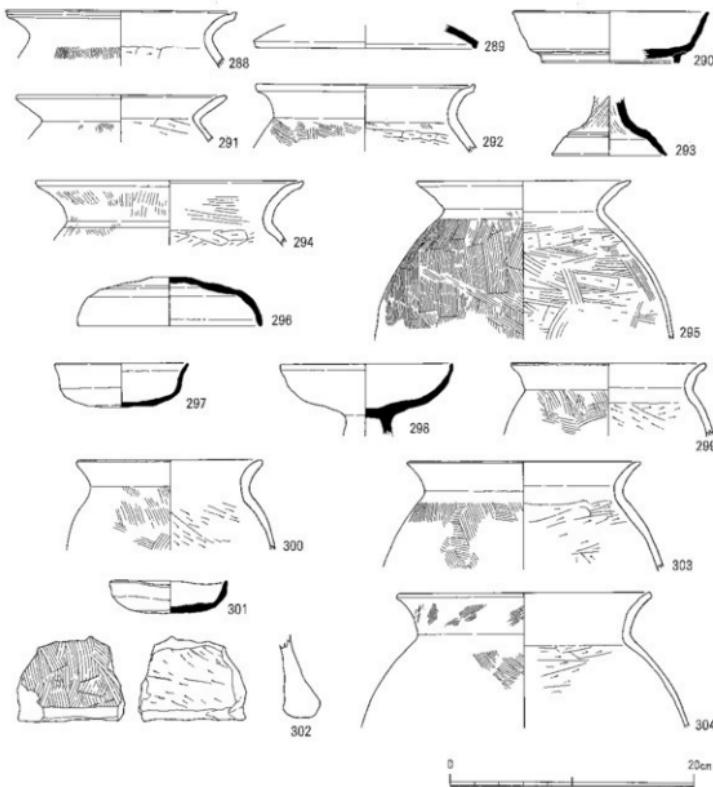
284



第35圖 石器 (3)



第36図 石器(4)



第37図 古墳・奈良時代の遺物

## 2. 古墳・奈良時代の遺物

調査区内から出土した古墳・奈良時代の遺物は遺物コンテナにしてわずか1箱と少量である。これらはⅡ区の竪穴住居跡およびその周辺の包含層から出土したものがほとんどで、I区から出土したものはほとんどない。須恵器、土師器、石製紡錘車などがある。ここでは竪穴住居跡出土遺物を中心に述べることにしたい。

288は外反して開く口縁部を持つ土師器の甌である。口縁端部には強いヨコナデを施しているため、外側に面を持ち、若干上方に拡張されている。端面には回線が1条巡っている。内面はヘラケズリ、外面にはハケを施している。包含層から出土した。

289は須恵器の壺蓋の口縁部片である。天井部が欠損しているためつまみの有無は不明である。端部

は若干下方に折り曲げる。

290は底部と体部の屈曲が明瞭で、直線的にのびる体部と口縁部を持ち、輪高台を付加する須恵器の环身である。289・290はSH 0 1の埋土から出土した。

291・292は土師器の蓋である。291は「く」の字に折り曲がった頸部を持ち、口縁部は外反して開く。端部は丸くおさめている。口縁部にヨコナデ、体部外面は綫方向のハケの後ナデ、内面はヘラケズリを施す。292は緩やかに折れ曲がった頸部から、軽く外反して延びる口縁部を持ち、端部は少し上方につまみ上げている。口縁部には強いヨコナデを施す。外面は綫および斜め方向のハケを施し、内面は頸部付近にハケの痕跡があり、体部にはヘラケズリを行う。この2点はSH 0 1の床面から出土した。

293は須恵器の高坏である。脚部のみが残存する。脚部は屈曲して開き、屈曲部直下に凹線を施す。脚柱部内外面にシボリ痕跡が明瞭に残る。SH 0 1の埋土から出土した。

294・295は土師器の蓋である。294は緩やかに折れ曲がった頸部から、軽く外反する口縁部を持ち、口縁端部をわずかに上方に拡張し、外側に面を作る。外面はタタキの後ナデを施し、口縁部内面にハケメが残り、体部内面にはヘラケズリを施す。295は「く」の字に折り曲がった頸部を持ち、口縁部は外反して開く。体部下半を欠いているが、やや縦長の球胴を持つものと考えられる。口縁端部をわずかに上方に拡張し、外側に面を作る。体部は外面に主として綫方向のハケメが残り、内面はヘラケズリの後板状工具によるナデを行い、口縁部にはヨコナデを施している。この2点はSH 0 1の床面から出土した。296は須恵器の蓋である。天井部と口縁部の境界は不明瞭である。天井部の3分の2にヘラ切りの後、回転ナデを施す。外面に灰かぶりの痕跡が認められる。

297は須恵器の环身である。底部の約2分の1にヘラ切りのあと、回転ナデを施している。底部と体部の境界は不明瞭で、口縁部は外反して、外側に面を持つ。外面口縁部下で明瞭な色調の違いが認められ、重ね焼きの痕跡と思われる。ほぼ完形である。

298は須恵器の高坏である。脚部を欠き、焼成は非常に悪い。湾曲して立ち上がる环部を持ち、口縁端部を極めて薄く仕上げている。

299・300は土師器の蓋である。同一個体の可能性がある。いずれも丸みを帯びた体部から、明瞭に屈曲した頸部と外反して伸びる口縁を持ち、端部は丸く納める。口縁部にはヨコナデ、体部外面にハケの後ナデ、体部内面にヘラケズリを施している。

294~300はSH 0 2の埋土内から出土した。

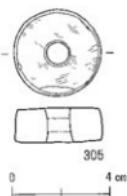
301は須恵器の环身である。完形品であるが、全体的にかなり歪んでいる。若干丸みを帯びた底部から、明瞭な境界を持たずに立ち上がる体部を持つ。

302は移動式カマドの裾部と思われる破片である。外面には綫方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。端面はヘラケズリで成形後、ナデで仕上げている。

303・304は土師器の蓋である。303は丸みを帯びた体部から屈曲して外反する口縁部を持ち、端部は丸く納める。口縁部はヨコナデ、体部外面は横方向のあと綫方向のハケ、体部内面は上半が横方向、下半には綫方向のヘラケズリを施す。

304は丸みを帯びた体部から明確な頸部をもって屈曲し、外反する口縁を備えている。口縁端部は外側に面を持つ。外面は口縁部も含めてハケ調整を行い、口縁部はヨコナデ、体部内面にはヘラか刷りを施している。

305は砂石製の完形の紡錘車である。円滑に研磨され、直径約36mmの円形で、 第38図 石製紡錘車



厚さは約14mm、重さ22.4gを測る。穿孔は両側より行い、最大直径11mm、最小直径9mmである。

301~305はすべてSH03の床面より出土した。

各住居跡出土土器の時期について考えてみたい。出土点数が少ないため、不正確になることも考えられるが、一応の目安として述べてみたい。

須恵器に関しては、それぞれに坏が認められる。SH01のものは床面直上の出土ではないが、坏Bのセットであり、蓋にはかえりを持たず、身の高台も外方に踏ん張った形態をとっている。SH02の坏蓋・身には回転ヘラケズリが認められず、八代宮ノ谷窯跡出土品と共通する点がある<sup>(10)</sup>。ただし、坏身に関してはさらに小型化している。SH03の坏身は小型の坏Aと考えて良いと思われる。土師器は発見しない。これらは体部の残存状況が悪いものの、長胴気味のものは少なく、球胴を呈するものがほとんどを占めている。調整技法の点からも共通するものが認められ、時期差の抽出は困難である。

したがって、遺物の時期としてはSH02が7世紀中葉、SH01・03が7世紀後葉～8世紀初頭に位置づけられると思われる<sup>(11)</sup>。

## 第4節 探査の結果

### 1. 探査の目的

I区において検出されている集石遺構がII区にも存在するか、さらに集石遺構は熱を受けているか（被熱遺構）どうかを探る目的で探査を実施した。道路センターNo.63を基準に東西18m、南北77mの探査域を設定し、電気と磁気探査をおこなった。I区や崖法面は探査測定から除外している。

磁気探査は局部磁気異常を探るもので被熱遺構の発見に有効であり、電気探査では集石箇所は土壤より電気抵抗が高いと考え、周囲よりも相対的に高比抵抗箇所が集石遺構を表すと想定した。

探査の結果、磁気探査では磁気異常は認められず被熱遺構の存在は薄いものと考えられた。

今回の報告では、電気探査の結果を報告する。探査成果図は電気抵抗値を白黒の濃淡で、高比抵抗値を濃く、低比抵抗値を薄く表している。

### 2. 電気の結果

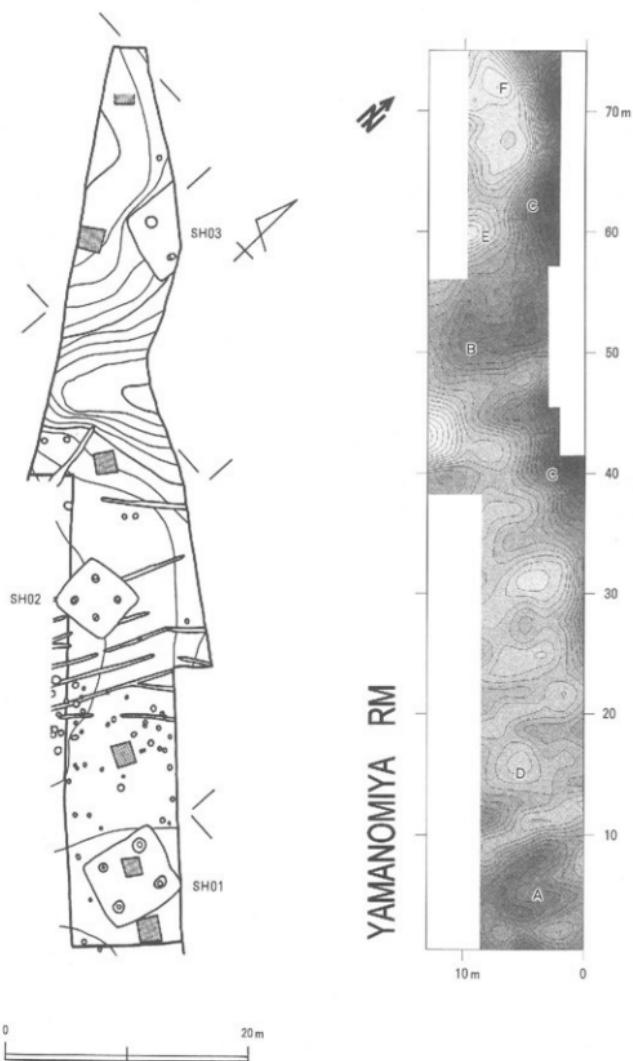
電極配置は2極法を採用し、電極間隔は0.75mで南北測線に沿って0.5mピッチで測定した。探査深度は約0.5m程度である。なお、測定機材はGeoscan社製RM15を使用した。

高比抵抗箇所として三箇所認められる。Cの位置は崖面上で電気抵抗が高く測定された結果である。それ以外のA・Bが注目される。Aは一边が約7~8m、Bは約4m四方である。集石遺構としてはやや大きく、他の遺構が想定される。

低比抵抗箇所はAの北側に多く認められ、幅約1m程度探査区を斜めに横断し、溝跡などが想定される。局部的に低比抵抗値が集結しているD~Fは確認調査で掘削された坪の痕である。

### 3. まとめ

集石遺構を探る目的で探査を行ったが、探査区内には対象とする遺構が存在しなかったことにより当初の目的は達成されなかった。電気探査で注目したAのみが堅穴住居跡を表している結果となった。



第39図 探査成果図

## 第4章 まとめ

### 第1節 縄文時代について

今回の調査では、遺構としては縄文時代のものと考えられる集石を検出したのみで、住居跡や貯蔵穴などはみつからなかった。しかしながら、集石の検出位置や遺物の出土状況から考えて、縄文人が微高地上で活動をおこなっていたと推定することはできるであろう。

これに対して、縄文土器は小破片が多いながらも比較的多く出土した。土器は層位的に出土したものでないため、これらの資料から編年作業を行うことはできるものではない。しかしながら、縄文時代早期の土器は、現在のところ報告例がそれほど多くはなく、興味深いものがいくつか含まれるようなので、他地域、他遺跡での様相を参考にしながら、その位置づけを考えてみたい。

今回出土した土器のなかで最も古いものはIA類のネガティブ押型文の土器である。そのなかでも、1や3は矢野継による大川式の新段階のものである。その他の固体は大川式か神宮寺式かを区別することはできない。ただし、11や14などはやや様相を異にするもので、黄島貝塚などで出土しているものに類似していることから、やや時期の下がる可能性がある。

これに引き続いて、IB類とした山形押型文の土器やIC類とした楕円押型文の土器が現れる。IB類には17などの神並上層式のものがごく少數ある他は、瀬戸内地方の黄島式に並行する時期のものと考えられる。37が縱方向に施文する以外は、横方向に施文している。37にはさらに口縁部内面に原体条痕が施されている。IC類には黄島式に並行する時期のものと高山寺式のものがある。楕円の粒が小さいものには38、45などのように横方向に施文したものが多くみられ、やや粒がおおきくなると口縁部内面に原体条痕が施されたものがみられる。これらは黄島式に並行するするものとかんがえられる。それにたいして、100、101などのさらに粒の大きいものには口縁部に斜行沈線が施された高山寺式のものがある。82、83などは100、101などと同様に施文を施したのちナデを施していくために楕円が不鮮明になっていることから、高山寺式もしくはそれに近い時間のものと考えられる。

また、これに同じ時期と考えられるもののII F類とした撚糸文の土器がある。166は口縁部内面に原体条痕をほどこし、体部内面上位に撚糸を横方向に施文するなど、IB類の37やIC類の75などと施文原理が共通している。また、170もIC類の83などと施文原理が共通している。

高山寺式に引き続く押型文の土器である埴谷式の土器はみられず、これに次ぐ時期のものと考えられている鶴ヶ島台式や茅山下層式などに類似する関東系の土器が出土している。これらの土器は刺突や沈線を多様して施文をおこない、胎土には纖維を含むものが多くみられる。また器形も頸部に段をもつようになる。このような関東系の土器は近畿地方では滋賀県の石山貝塚<sup>(13)</sup>、磯山城遺跡<sup>(14)</sup>や大阪府の仏並遺跡<sup>(15)</sup>などでごく少数出土するのみで、山宮遺跡や神鍋遺跡<sup>(16)</sup>での出土例が最も西端にあたる。

また、この時期のものと考えられる平柄式や塞ノ神式に類似する九州系の土器も出土している。これらの土器は網目状のより糸、口縁部下の沈線、羽状沈線、貝殻による刺突や条痕などが平柄式に、格子状の沈線は塞ノ神式の特徴に類似している。このような九州系の土器は中四国地方に点々と分布しており、神鍋遺跡<sup>(16)</sup>や閑宮町の杉ヶ沢遺跡<sup>(17)</sup>などとともに出土例の最も東端にあたる。

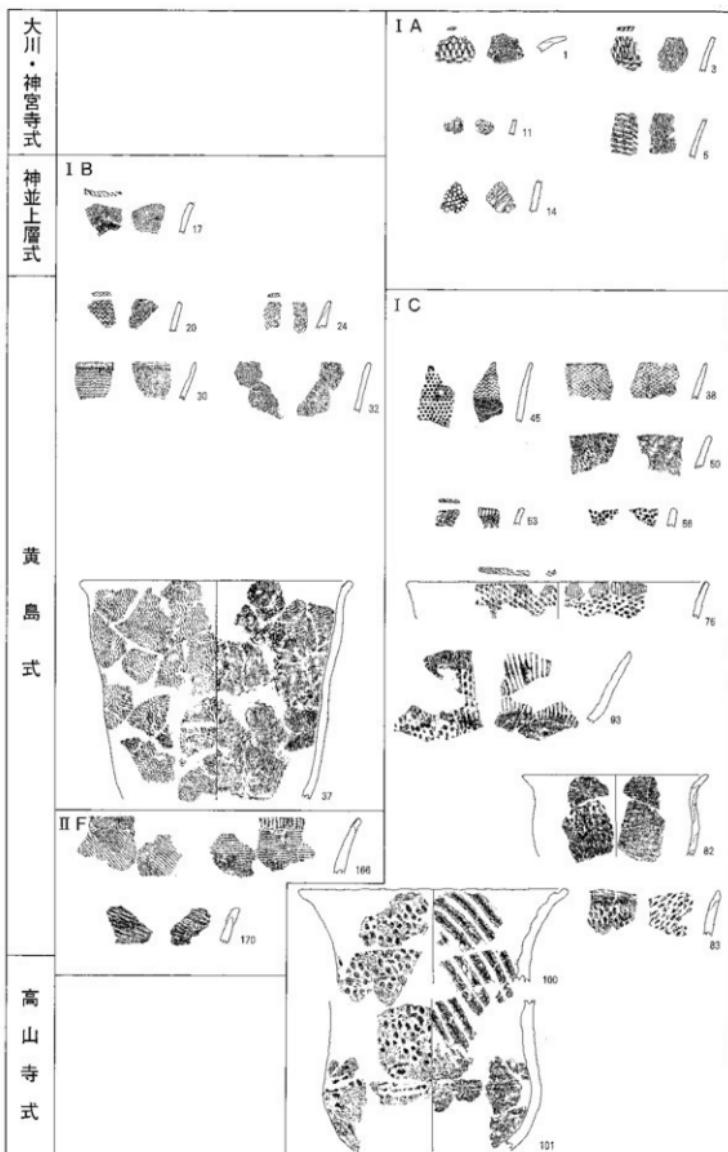
これに次ぐ時期のものとしては、II B類などの外面に縄文を施す土器が比較的まとまって出土している。これらの土器は北近畿地方で宮ノ下式、山陰地方で菱根式とよばれ、器表面に単節縄文や羽状縄文を施し、胎土に纖維を含んでいる。226などのように頸部に段をもつ器形のものや201、147、198、200などのように刺突を施すものがみられるが、大多数は体部から直線的に開く器形で、器表面には縄文のみが施されている場合が多いようである。頸部に段をもつものや刺突を施すものは井上氏が寄倉12層式とするもので、関東系の土器の器形や施文技法の影響を受けて成立したものと考えられている<sup>(18)</sup>。II B類やII C類などには口唇部にキザミを施すもの、縄文を施すもの、文様を施さないものなどのバリエーションがあるが、それぞれの前後関係などはよくわからない。その他、189、190などのIV類は143と口縁部の形態が類似することからこの時期のものであり、251は平底の纖維土器であることから宮ノ下I式と考えられる。

227は薄手の表裏縄文の土器にキザミ目突帯が付くもので、井上氏が菱根式に後続する土器形式として設定した長山式の土器と考えられる<sup>(19)</sup>。III類の条痕文土器については纖維を含むものが少なく、早期の終末頃あるいは、前期初頭にまで下る可能性がある<sup>(20)</sup>。

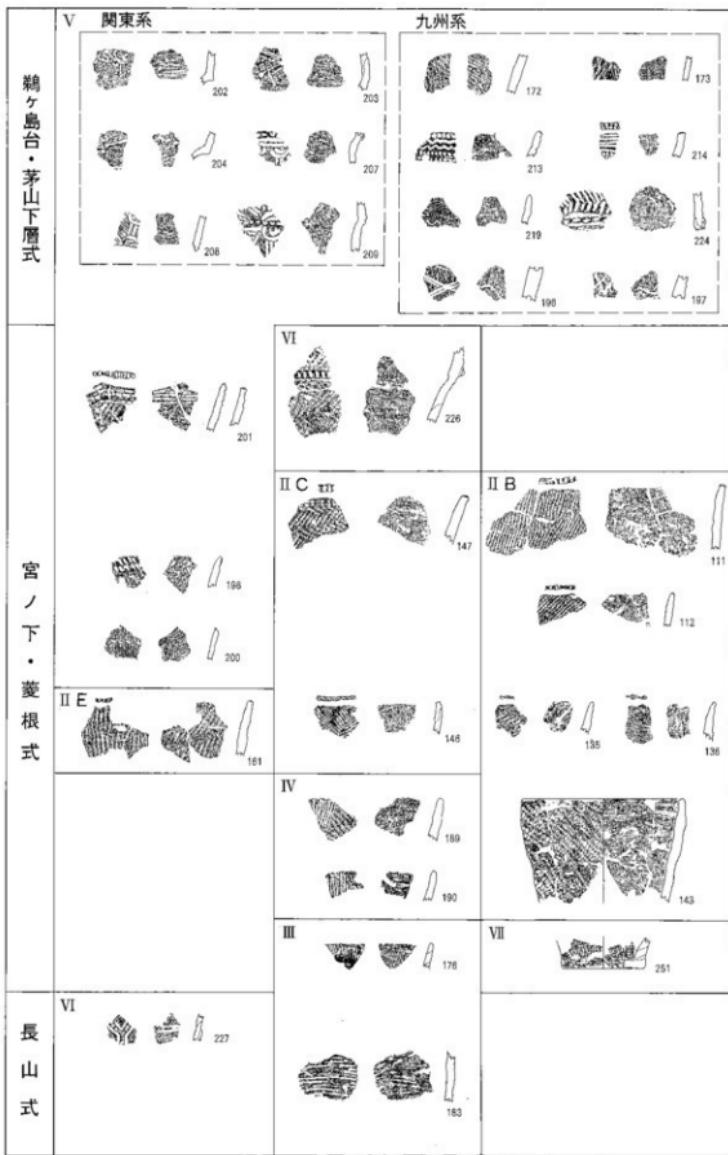
以上のように、山宮遺跡で出土した縄文土器は、早期の初頭と穗谷式を除く以外は、様々なバリエーションのものが出土しており、当時期において層位的な資料が恵まれない現在では貴重な資料といえよう。

## 第2節 古墳・奈良時代について

今回の調査では、古墳時代末から古代初頭の集落の一部が明らかになった。全ての堅穴住居跡で作りつけの竈が認められ、形状はそれぞれ共通しているが、取り付ける位置に一貫性が認められなかった。また、SH02のようにコーナー部分に竈を据えるものは県下での類例が少ないものである。京都府綾部市周辺にはコーナーに竈を持つ「青野型住居」が認められるが<sup>(21)</sup>、当遺跡のものとはかなり差違がある。ただし、類例が増えてくれれば但馬の地方色として認定される可能性がある。また、SH01・03のものは所属時期の点で、竈を持つ堅穴住居の下限となる資料となった。



第40図 縄文土器の様相（1）



第41図 純文土器の様相（2）

注

- (1) 日高町史編集専門委員会『日高町史 資料編(考古編)』(1976) 日高町教育委員会  
日高町教育委員会『日高町遺跡詳細分布調査報告書』(1986) 日高町教育委員会  
兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史 考古資料編』(1992) 兵庫県
- (2) 阿久津久・和田長治・秋枝芳「山の宮遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報 第2集』(1974)
- (3) 矢野健一氏のご教示による。矢野健一「押型文土器の起源と変遷」『考古学雑誌』78-4 (1993)  
日本考古学会
- (4) 井上智博氏のご教示による。以下、宮ノ下式・菱根式・長山式などについては氏のご教示による。井上智博「西日本における縄文時代早期末の土器様相」『研究紀要』2 (1995) 財團法人大阪文化財センター
- (5) 新東晃一氏のご教示による。以下、九州系の土器については氏のご教示による。新東晃一「九州島外の南九州系縄文土器」『南九州縄文通信』8 (1994) 南九州縄文研究会
- (6) 潮見浩「帝釈峠遺跡群出土の織維土器」『論集日本原史』(1985) 吉川弘文館
- (7) 矢野健一氏のご教示による。以下、関東系の土器については矢野氏のご教示による。
- (8) 杉ヶ沢遺跡第14地点調査区7出土の土器など。渡辺昇・久保弘幸『杉ヶ沢遺跡』(1991) 兵庫県教育委員会
- (9) 石器については山本誠氏のご教示を得た。
- (10) 蕤田哲郎・奥西藤和「八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」『鬼神谷窯跡発掘調査報告』(1990) 竹野町教育委員会
- (11) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』(1966) 平安学園考古クラブ  
『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東2 須恵器ー』(1993) 古代の土器研究会  
『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東3 7世紀の土器ー』(1997) 古代の土器研究会
- (12) 原口正三・坪井清足『石山貝塚』(1956) 平安学園考古学クラブ
- (13) 中井均『礪山城遺跡』(1986) 米原町教育委員会
- (14) 松尾信裕「仏並遺跡包含層出土の土器」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 (1995) 財團法人大阪府埋蔵文化財協会
- (15) 和田長治氏のご教示による。
- (16) 和田長治氏のご教示による。
- (17) 注(8)文献
- (18) 注(4)文献
- (19) 井上智博「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相—中国地方を中心としてー」『考古学研究』38-2 (1991) 考古学研究会、注(4)文献
- (20) 河瀬正利「山陰地方の縄文早期・前期土器の様相」『山陰考古学の諸問題』(1986) 山本清先生喜寿記念論集刊行会
- (21) 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」『京都府綾部市文化財調査報告第9集』(1982) 綾部市教育委員会



調査地遠景（南東から）



調査地遠景（東から）



I 区全景（北から）



II 区全景（東から）



I区全景（北西から）



I区全景（南東から）



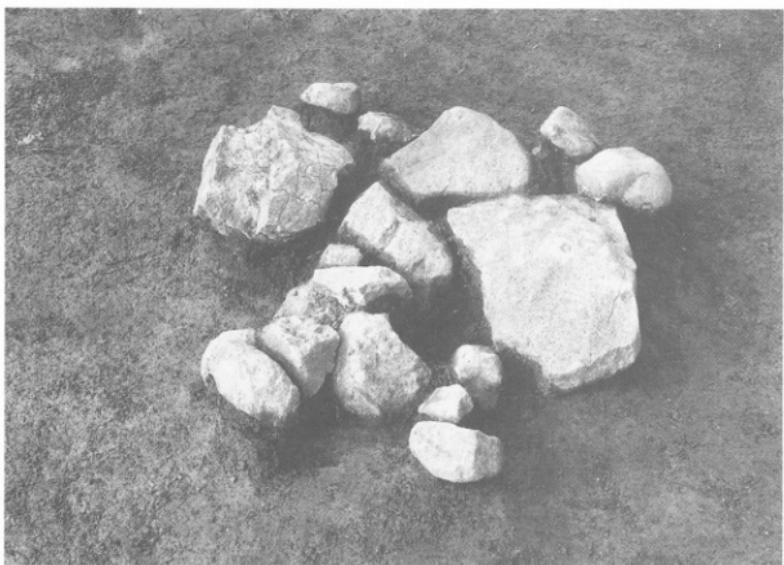
集石 1～3（南から）



集石 1（東から）



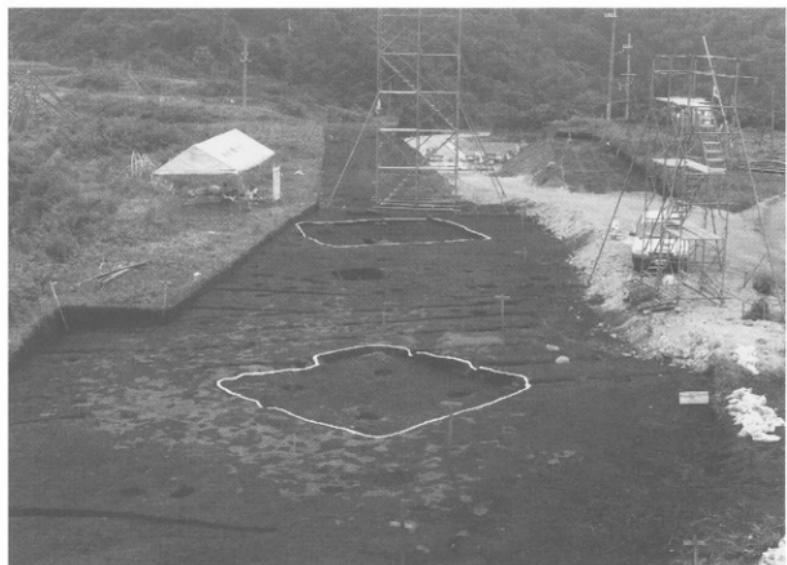
集石 2 (南から)



集石 3 (南東から)



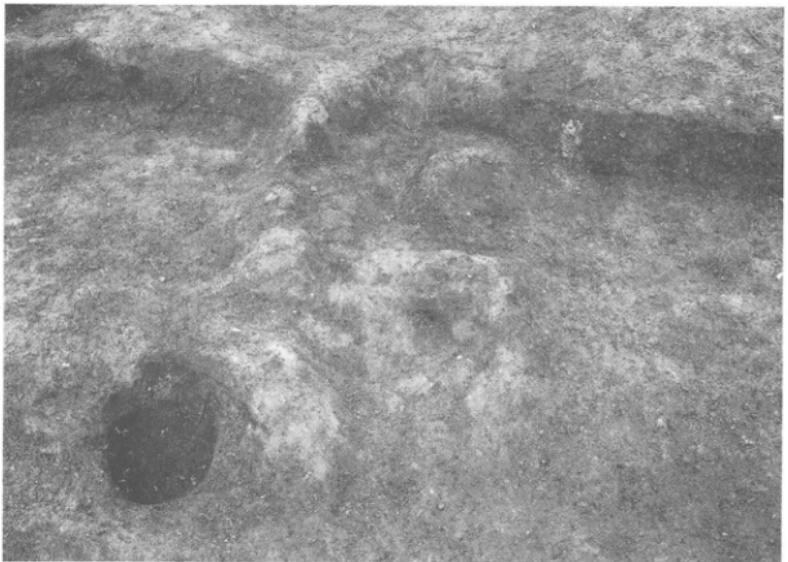
II区全景（南東から）



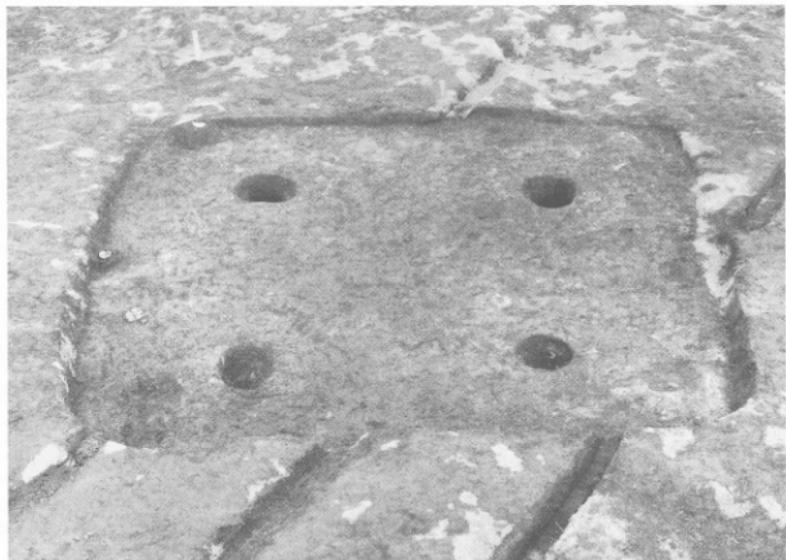
II区東半部（北西から）



SH 01 (西から)



SH 01 墓（西から）



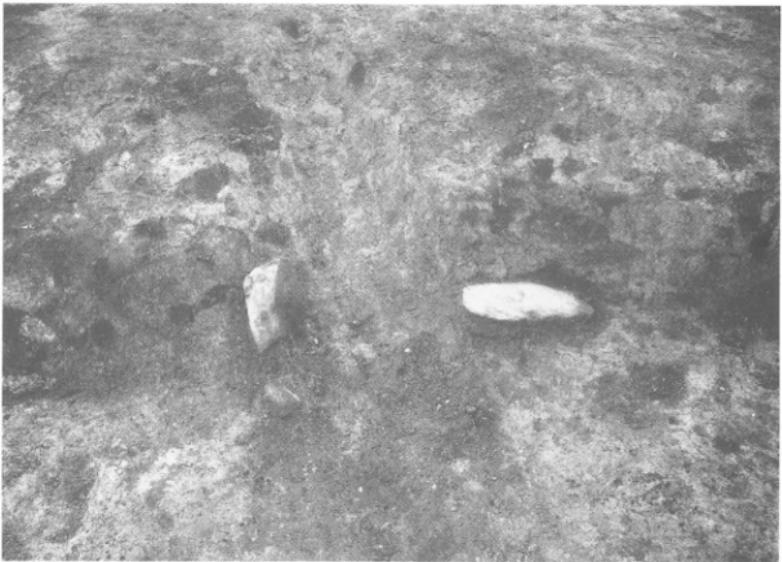
SHO 2 (南から)



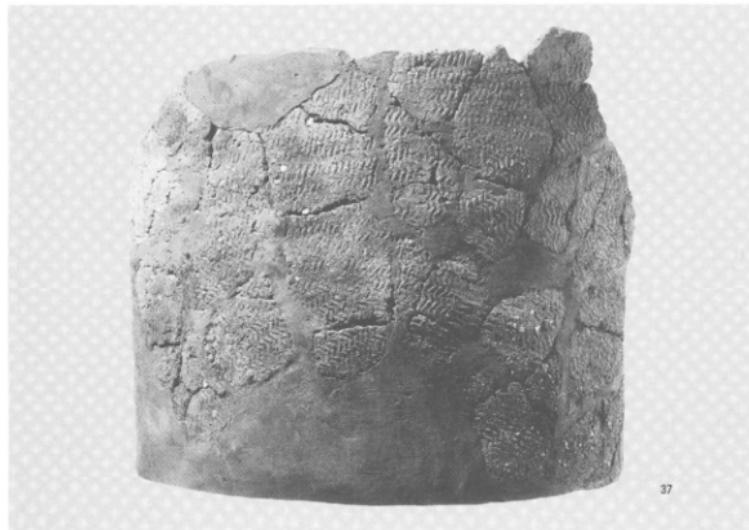
SHO 2 窓 (北から)



S H 0 3 (南から)

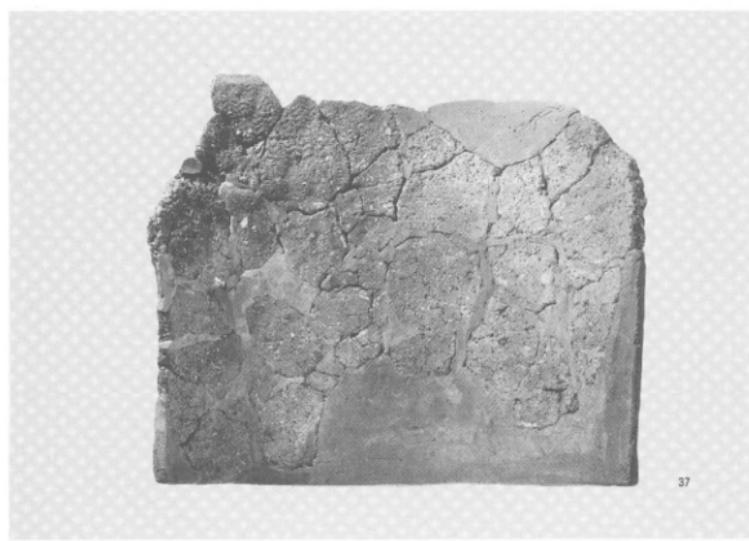


S H 0 3 窟 (東から)



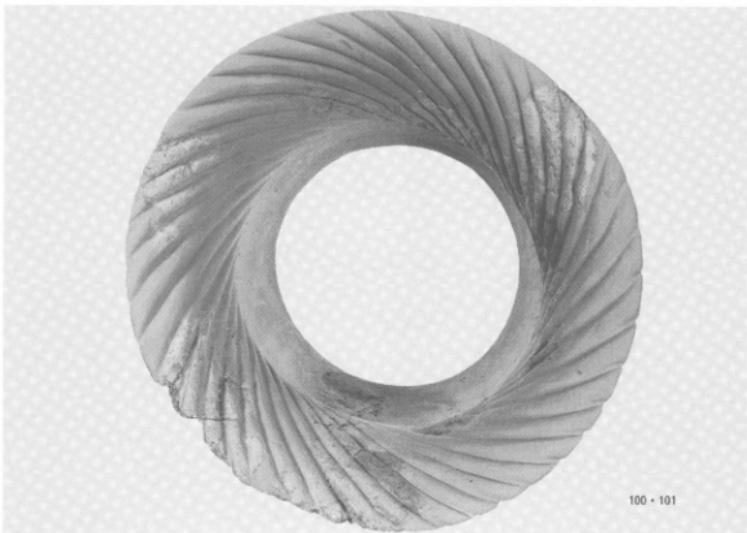
37

縄文土器（1）表

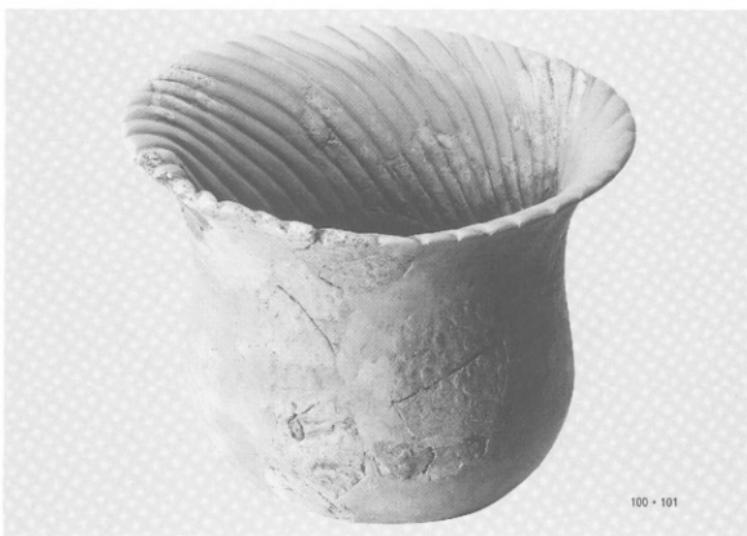


37

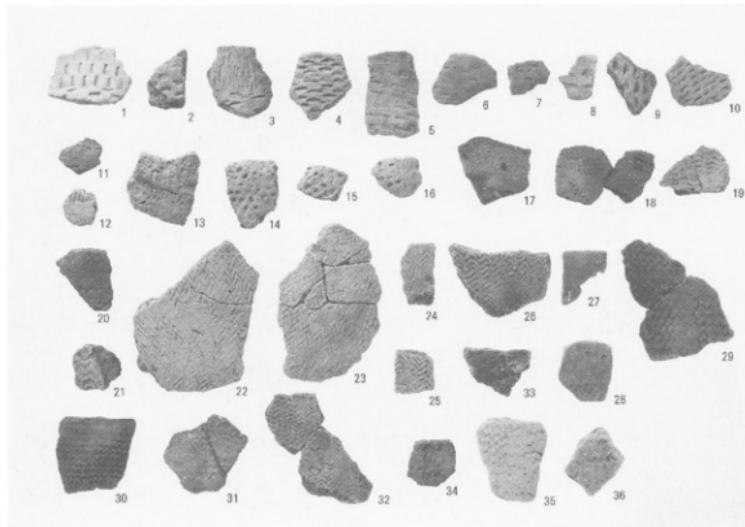
縄文土器（1）裏



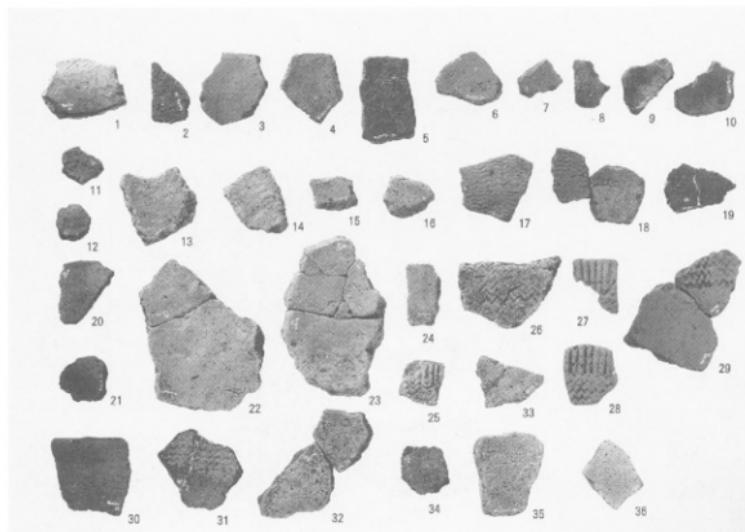
縄文土器（2）俯瞰



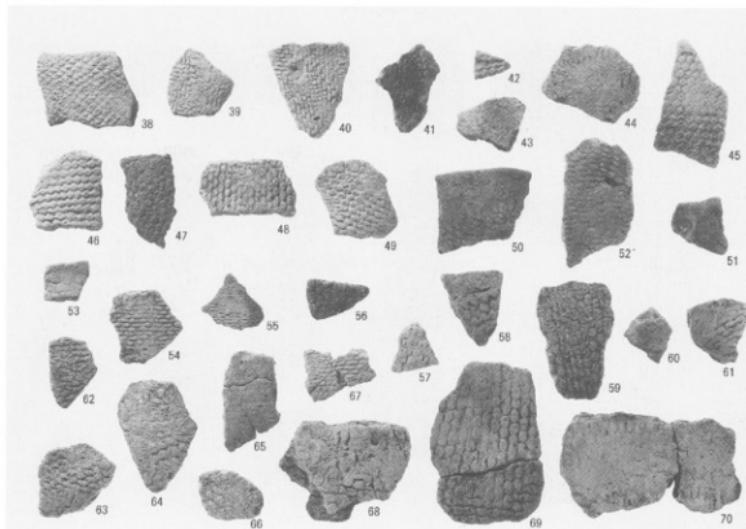
縄文土器（2）横



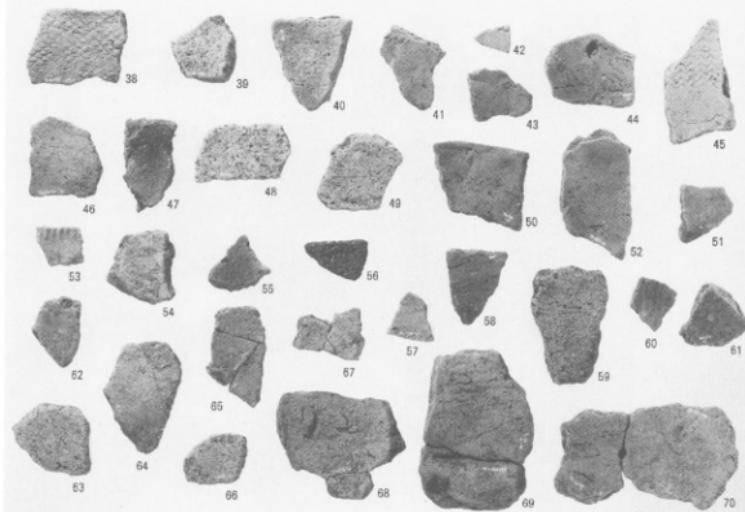
縄文土器（3）表



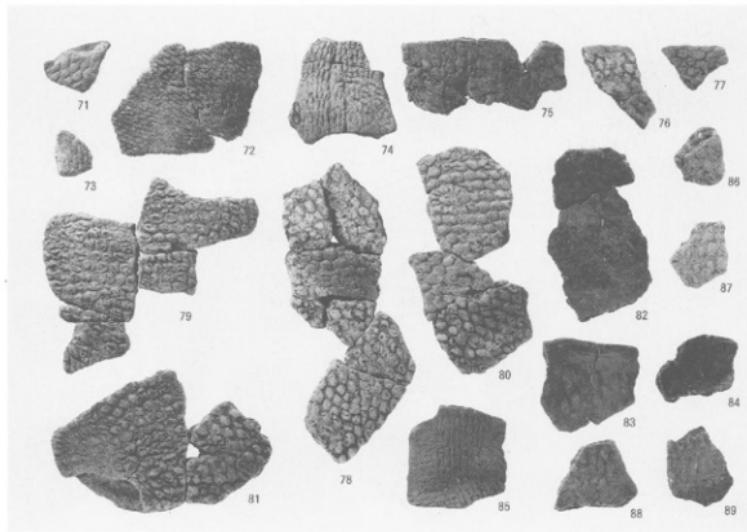
縄文土器（3）裏



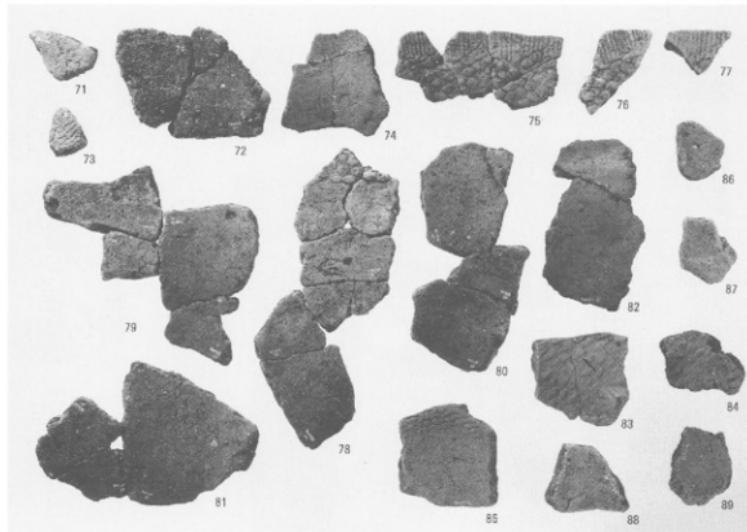
縄文土器（4）表



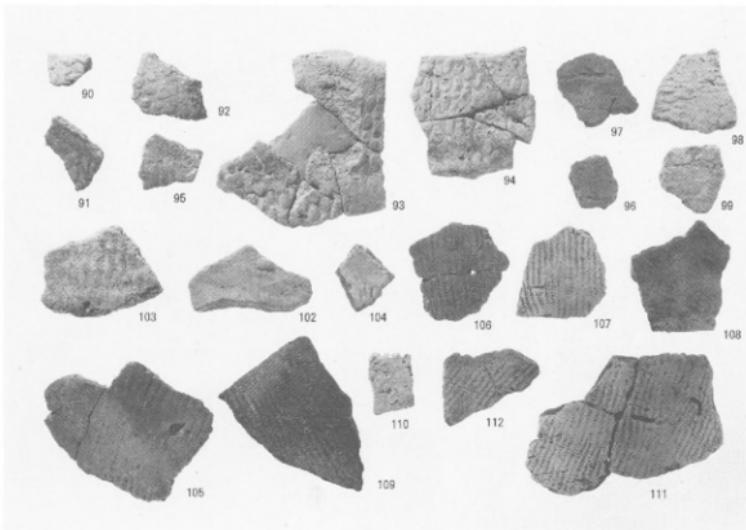
縄文土器（4）裏



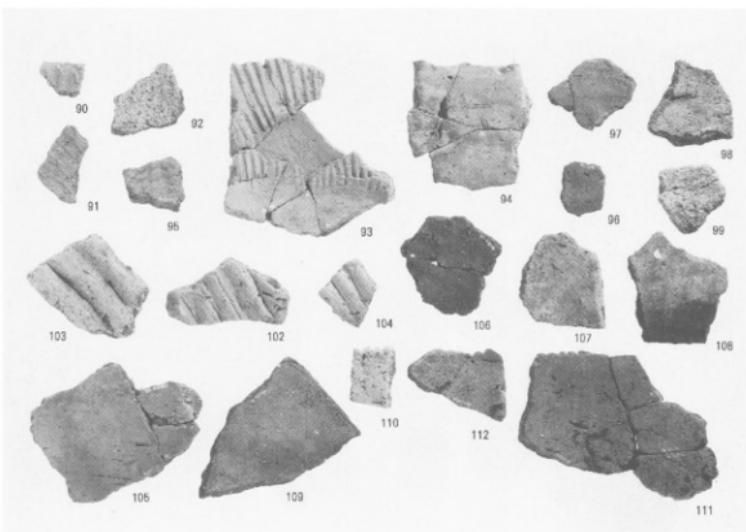
縄文土器（5）表



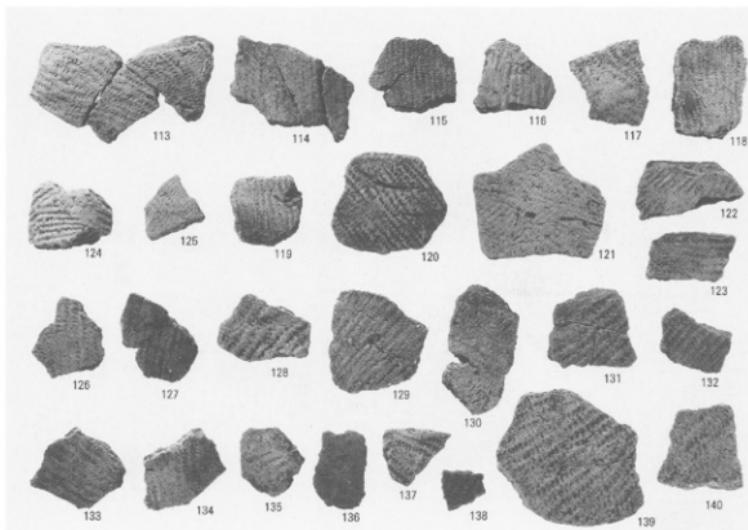
縄文土器（5）裏



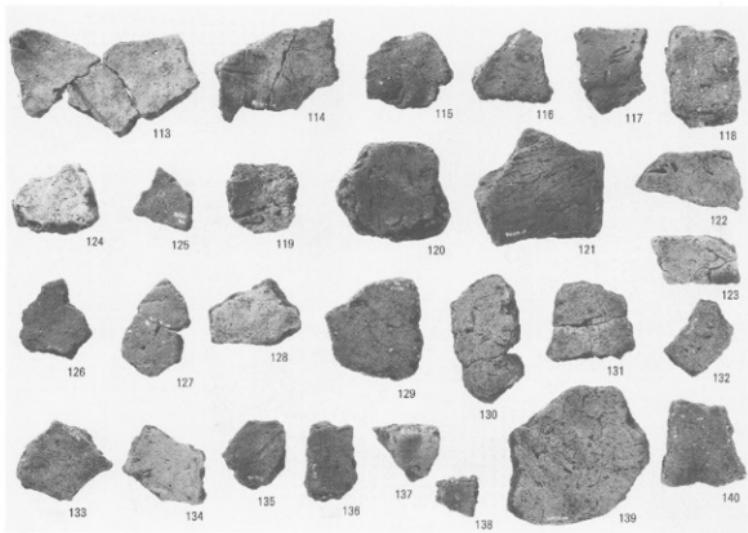
縄文土器（6）表



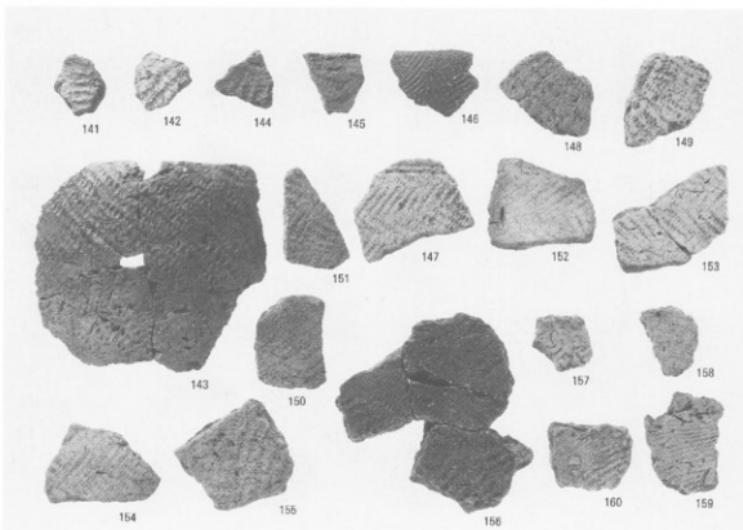
縄文土器（6）裏



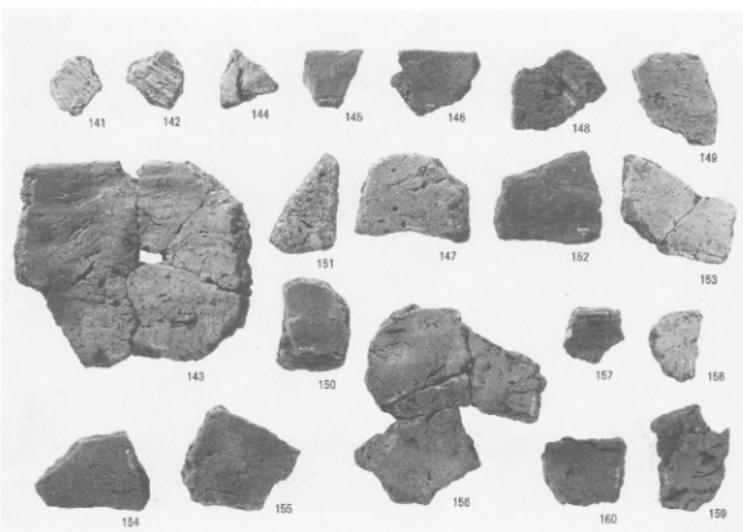
縄文土器（7）表



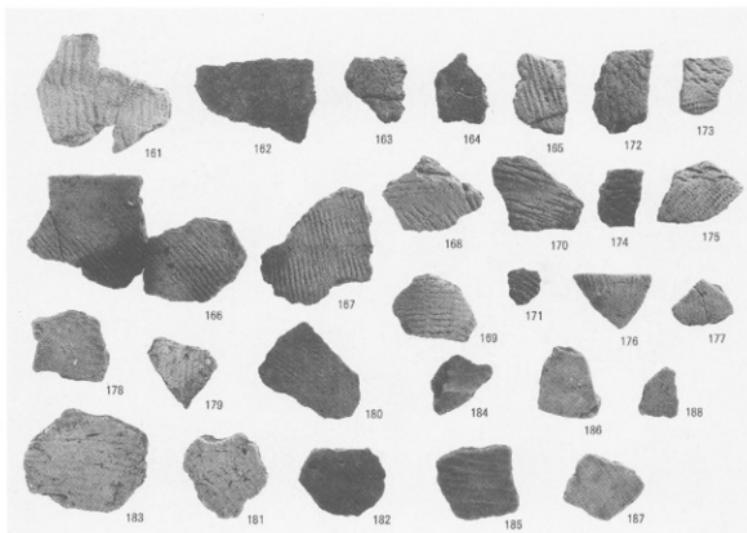
縄文土器（7）裏



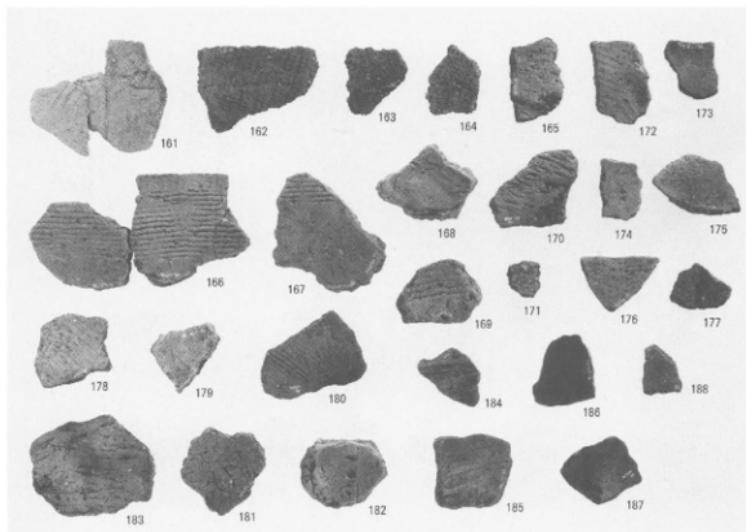
縄文土器（8）表



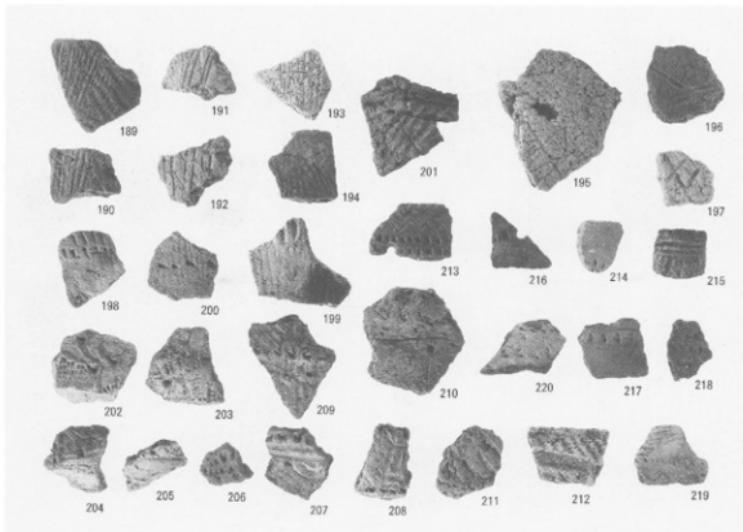
縄文土器（8）裏



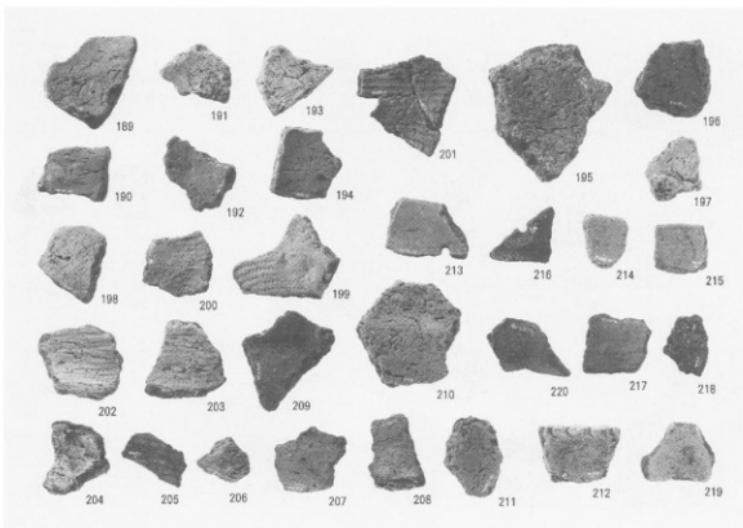
縄文土器（9）表



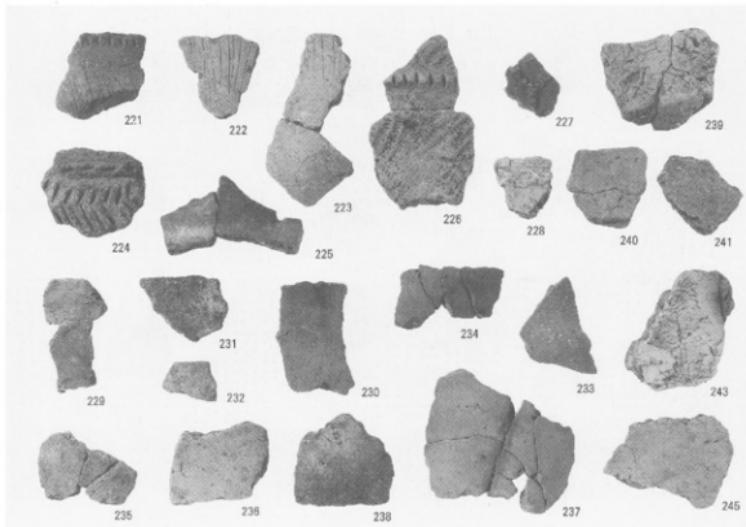
縄文土器（9）裏



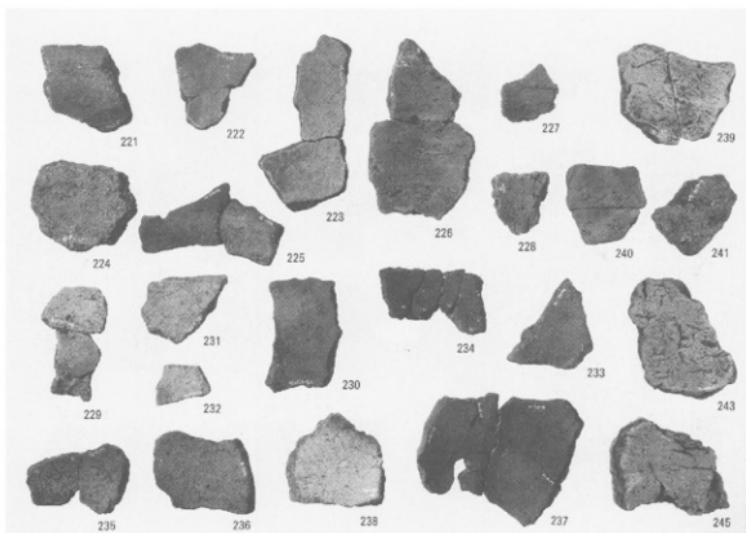
縄文土器 (10) 表



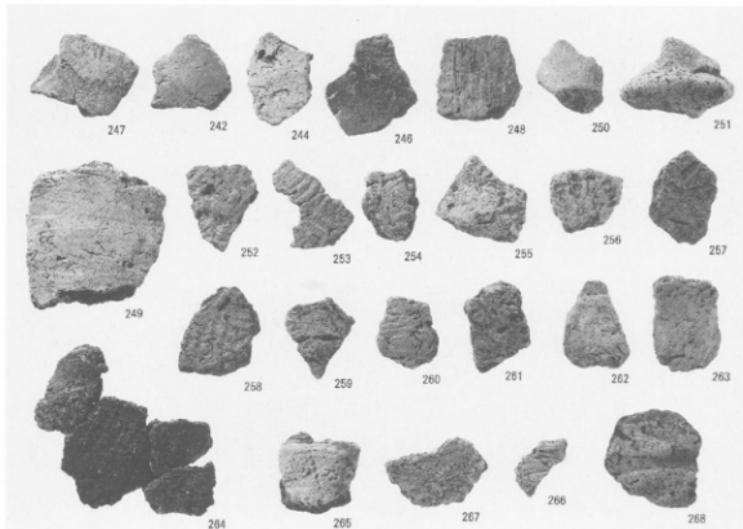
縄文土器 (10) 裏



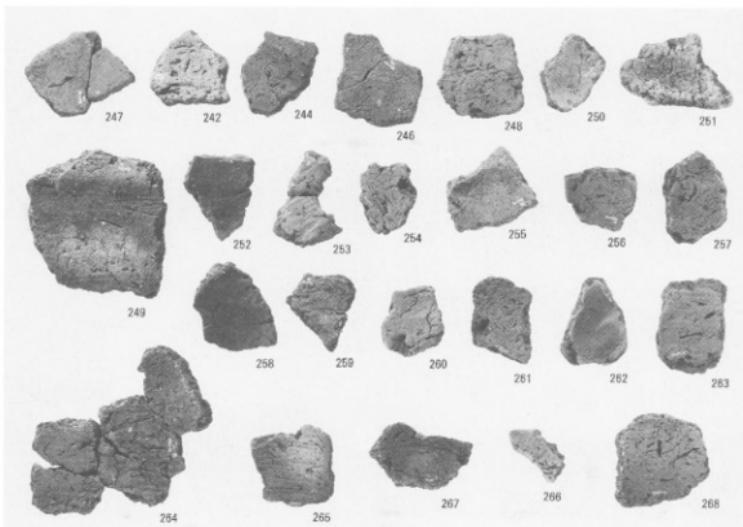
縄文土器（11）表



縄文土器（11）裏



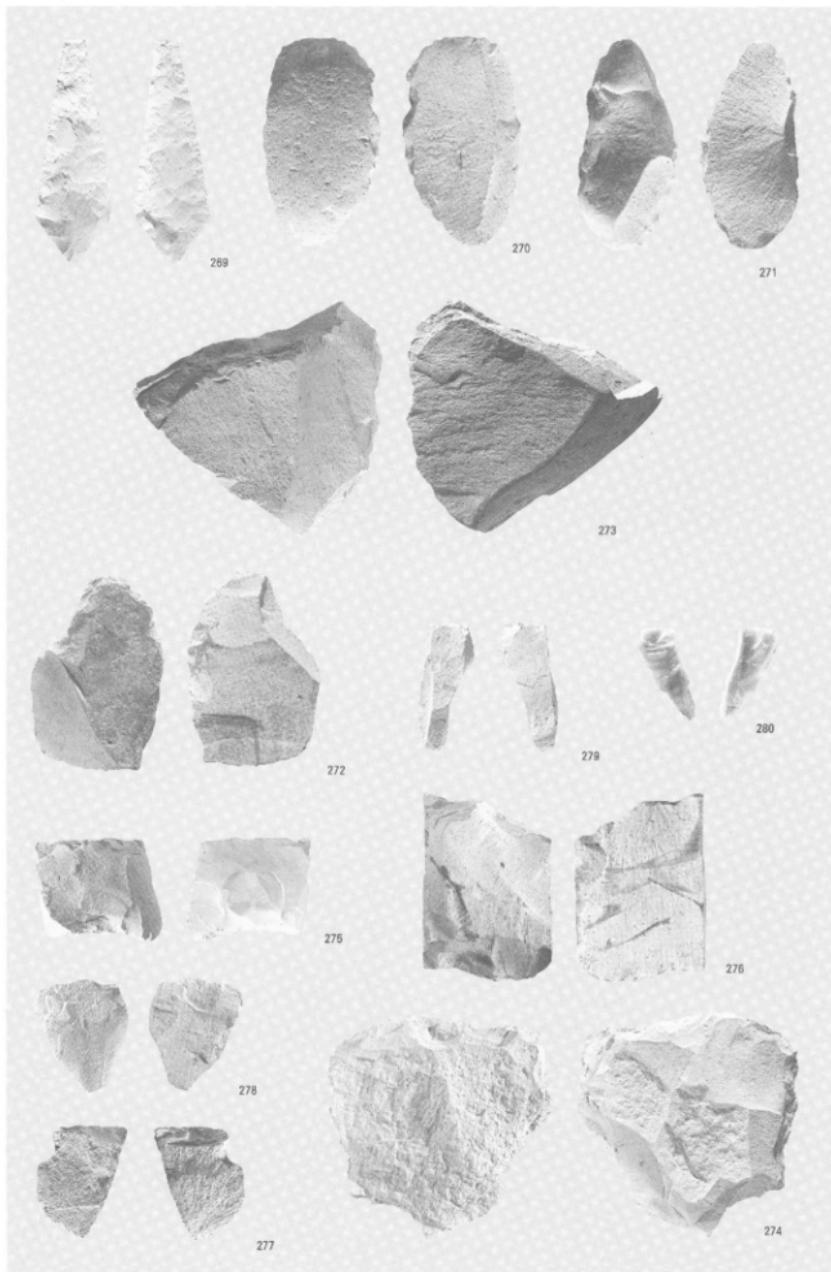
縄文土器 (12) 表

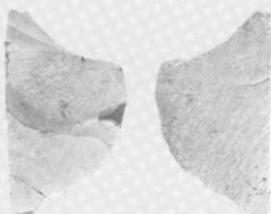


縄文土器 (12) 裏

# 写真図版22

## 石器（1）

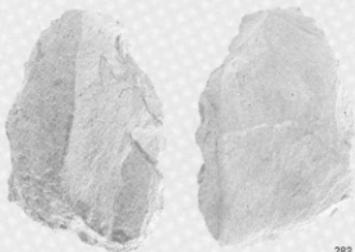




281



282



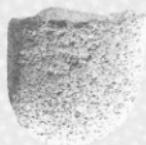
283



284



285



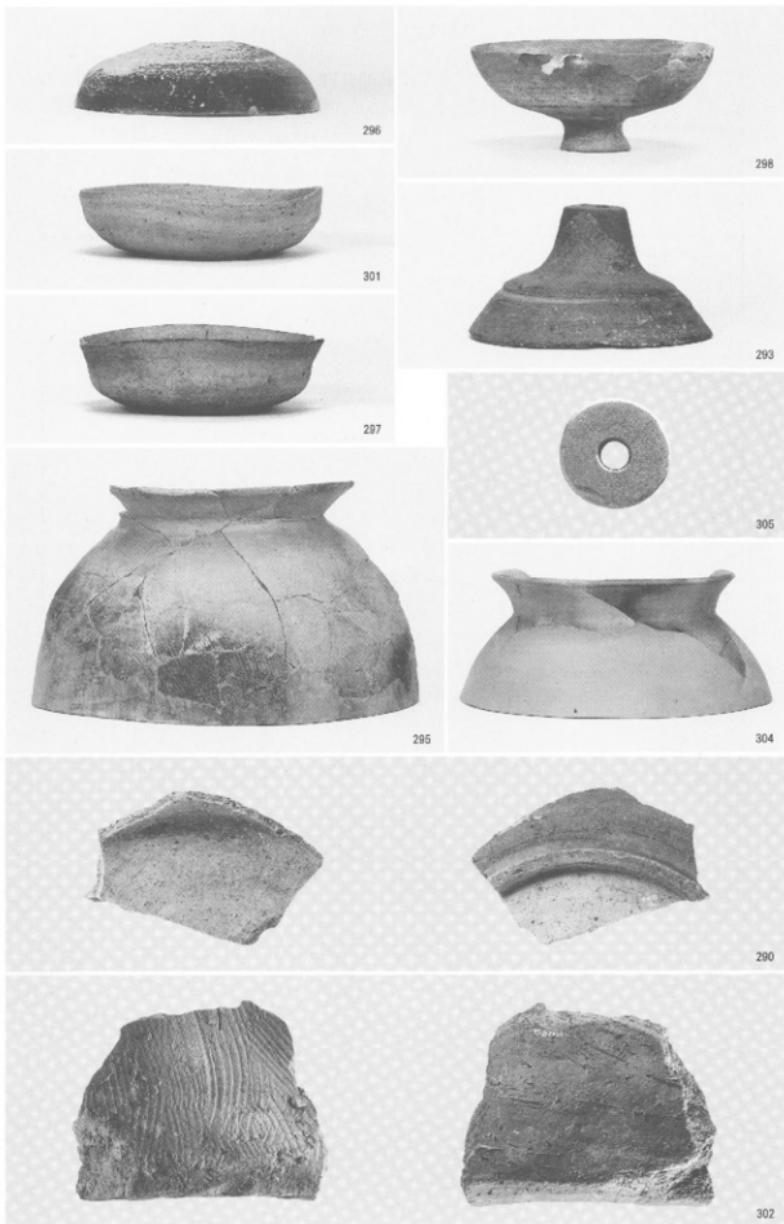
287



286

# 写真図版24

## 古墳・奈良時代の遺物



報告書抄録

ふりがな	やまのみやいせき							
書名	山宮遺跡							
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第172冊							
編著者名	池田征弘・西口和彦・鐵英記・野村辰右							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL.078-531-7011							
発行年月日	西暦1998(平成10)年3月31日							
所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
山宮	兵庫県城崎郡	28544	950233	35度 29分 33秒	134度 42分 17秒	確認調査 19950829 19950901 全面調査 (Ⅰ区) 19961203 19970203 全面調査 (Ⅱ区) 19970519 19970612	64 m <sup>2</sup>  1448 m <sup>2</sup>  678 m <sup>2</sup>	農林漁業 用揮発油 税財源身 替農道整 備事業に 伴う 事前調査
	山宮字般若		960359					
			970155					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山宮	集落跡	縄文早期	集石3基	縄文土器 石器				
	古墳後期 奈良		堅穴住居3棟	土師器・須恵器 石製纺錘車				

---

---

兵庫県文化財調査報告 第172冊

## 山宮遺跡

－農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

平成10年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

-0032 TEL 078-631-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

-0011

印刷 大神印刷株式会社

〒652 神戸市兵庫区本町1丁目4番21号

-0834

---